

Laboratory Report

[限定公開!実験場 非公式レポート第4号]

はじめに

限定公開!実験場 管理人あさぎです。
新説/珍説プチ上げま Show!」PDF 版を手にとっていただき、ありがとうございます。

このファイルを転載などで入手なさった方のために簡単に説明しますと、私こと「あさぎ」が管理している「限定公開!実験場」というWeb サイト(アドレスは、<http://www.synapse.ne.jp/mist-a/>)では、機動戦士ガンダムに関連するデータベースを扱っております、そこで独自に展開している、いわゆる「俺説」が、本文内でも触れている「新説/珍説プチ上げま Show!」というコーナーです。

これを独立した PDF 形態にしたものが、このファイルと言うことです。

「新説/珍説プチ上げま Show!」では、とにかく「他人に対して、何かしら訴える」ことを目標としています。(詳細は、次ページの枕を読んでください。)これを読まれて、何かしら感じるところがあれば、積極的にご意見下さい。

内容については、サイト内で展開しているいつも通りの「新説/珍説プチ上げま Show!」ですが、今回も PDF による製作を行っています。PDF 版の製作意図について簡単に述べますと、「1.文章が長くなってきたために Wiki での閲覧にそくわない」、「2.一部内容の転載対策(下記注意参照)のため」といった理由からこのような配布形態を取らせていただいています。

本来ならば、誰もが閲覧できる HTML や Wiki 上での編集にとどめたいのですが、かつて「意図することと全く異なった内容」で転載され、受けなくてもいい批難を受けた苦い経験から「この手のオリジナル考察に対して」行っている制限です。ご理解をお願いしたいと思います。

なお、今回から、明確にシリーズ化と言うことにしましたので、それに合わせた構成に若干修正しています。また、既存の新説/珍説も環境が整い次第、順次 PDF 版として再リリースする予定です。

内容についてはいつも通りですので、スタートの文章もいつもと同じです(笑)

ご意見等がありましたら、サイト内雑談掲示板によるしくお願いします。

なお、今回の考察以外の考察一覧については、巻末に参考としてまとめてあります。

補足

Web (あるいはコンピュータ上)での閲覧と編集時の効率を考慮して、元ファイルは A4 サイズで編集していますが、実際には B5 サイズでの印刷を想定しています。

PDF の印刷を行う場合、ターゲットを B5 で行うといいでしょう

また、画稿については、投入する予定は現時点ではありません。しかし、前回の完成版について、非常にありがたい反応をいただいていますので、最終的に仕上げたものを限定配布する可能性は否定しません。

注意

本サイトは、元々はオリジナルの作品公開のためのサイトでした。

(現在でもその残骸は残っています(^;))

公開する内容については、私だけではなく、来訪した皆さんの作品も公開するというサイトだったので。しかしながら、無断転載や、直リンクなど妨害行為が続いたため、これらの公開を控えるようになっただけの話です。

今でもその方針を変えるつもりはありません。従って、転載防止とは謳っていますが、実際には申し出ていただければ、内容の転載については妨げるつもりは有りません。私の論説の意図するところをきちんと伝えていただければ、どうかだけが、転載に対する私の可否のスタンスです。実際、転載や直リンクを許可したサイトさんなどもありますので、勝手に意図しない形で転載し、苦情を受けたからって「クローズドサイト」だなんて言わないでくださいね > 某サイトさん(^;)

新説/珍説プチ上げまShow！

このコーナーは、ガンダム世界の資料や整合性などくそ食らえ！、とにかく奇抜な（なおかつ、ある程度の説得力を持った）新説/珍説をプチ上げるコーナーです（^^）

そのため、サイト内の他のコーナーと矛盾した記述も数多くあります。

故に、俺説度は他のコーナーの比ではありません（w

信じる/信じないはあなたの自由です！（笑）

本コーナーは、ご覧になった方の意見を取り入れ、よりいっそうのバージョンアップを行っていきます。説の本筋を変更しない（ここがポイント。説の本筋を変更した場合、他のサイトなどの意見と変わらなくなるでしょうから^^）様な、補完意見は次々取り入れていきます。

PDF 版追記：

今回の考察は、PDF 公開であるため、脚注をページ下部分に切り出す方法をとっています。前回の考察では、その都度手作業で編集していましたが、今回は、一太郎の持つ機能で試しています。この脚注に関しては、未だ試行錯誤の段階ですので、しばらくは色々な形を試してみたいと思います。

また、各種用語については、サイト内コンテンツの「ガンダム用語の〔似非〕知識 @ Wiki」（<http://gudamer.sakura.ne.jp/>）を参照していただくと、より詳細な記述が存在することもあると思います。

[註]

次ページよりの本文は、一部砕けた論文調でまとめてあります。

また、主眼となる視点を未来の宇宙世紀という観点（著者未定）で置いているため、他のガンダム世界の話については触れていません。（ただし、脚注に関しては筆者「あさぎり」のフォローという観点でまとめてあります。）

part.06 珍説RX-78系列考察

はじめに

TVアニメ機動戦士ガンダムは、「一年戦争」という架空の戦史物の中で、「アムロ・レイ」という一人の少年をカメラが追いかけることで、TVアニメとして成立していた。この作品において登場したロボット、すなわち、モビルスーツは、従前のロボットアニメと比して、様々な差違が存在している。

特に、主人公アムロの搭乗する、「RX-78 ガンダム」は、いわゆるロボットアニメの主要ロボでありながら、それまでのアニメでは無かった「兵器」としての描写も存在していた。無論、当時という時代がさせることもあり、多分にガンダムは「スーパーロボットの」な描写も存在しているのだが、この「兵器」としての描写は、放映終了後に「ガンブラ」^[#1]というアイテムのヒットにより、より一層大きくクローズアップされてくることになった。

さて、その「機動戦士ガンダム」であるが、このモビルスーツに関する様々な情報は、テレビ放映時に情報として提示された物ではなく、そのほとんどが放映後に様々な媒体を通じて我々視聴者側に提示された物であることは、この文章を読んでいる人には既知の事実であろう。様々なアニメ誌や模型雑誌などでアニメに関わる様々な設定が触れられ、中には作中に登場すらしていない事柄まで触れられるようになっていたのである。

ガンダム放映以前に大ブームを巻き起こした「宇宙戦艦ヤマト」においても様々な設定の存在は公開されており、実際にアニメ誌ではそれらを利用して記事を作成していることも多かった。しかし、ガンダムではこれが一歩進んだ形で世に現れることとなるのである。すなわち、「裏設定」や「考察」^[#2]といった形で記事が作成されることとなったのである。(もちろん、当時のアニメ誌などでこういった実際には使用されなかった設定などが触れられることは有りはしたが、そこまで含めて「世界観」としての設定構築が行われたのは、事実上ガンダムが初であったのである。)

本稿では、主要メカである「ガンダム」における「型番」(あえて、型式とはしていないのは、後々判ってくると思われるので、この導入部では触れないこととする)についてまとめてみたいと考えている。

なお、本稿枕部分の繰り返しになるが、この論説はあくまで筆者の独自の考え方である。様々な様々な解釈を行っているが、一般的ではない解釈を行っている部分も存在している。

内容について掲示板等(サイト内雑談掲示板、あるいは Wiki 内掲示板どちらでもかまわない)でのご意見、ご感想等、また、誤りの指摘は歓迎するが、通説だから間違い」という思考停止的な指摘は、スルーすることが多くなると思われるのでご了承いただきたい。

また、筆者が引用している資料以外で、様々な考察内容に影響を与えそうな資料を所持している方には、それらのフォローもお願いしたい。(本論が、根底からひっくり返るような資料があればなおさらである。筆者個人が、納得がいかない部分を納得できる解釈があれば、非常に嬉しい限りである。)

本稿は一部入手困難な資料が用いられている部分もあるが、比較的入手の容易な資料を中心に編集を行っている。これは、比較的新しめの資料の方が、様々な解釈がなされた後の比較的「統一見解」に近い状態のものであると考えられるからである。その上で、独自解釈を加えて展開した物が本稿である。

無論、これらの資料を中心に「別の解釈」を行うことは可能ではあるが、そういった部分からの「別の解釈」を行った物に関しては、また「別に提示する」こともあるだろう。

しかし、本稿の内容については、これらの資料の「解釈としては成立する」と思われるので、これを元に「否定する部分」、「払いていく部分」を提示いただければ幸いです。

参考資料

前節末文で触れたとおり、本稿は比較的入手が容易な資料を中心に編纂を行っている。しかしながら、入手困難な資料も多く存在していることもまた事実であり、それらに関しては、Wiki の項目で引用されている部分などを参考にさせていただきたい。

なお、ここに提示された資料が本稿編集の全ての資料ではないことを先にお断りしておく。多くの映像作品や雑誌等の記述もまた参考にはなっており、それらの解釈も用いられていることは間違いのないからである。(というか、正直言えば、どの資料のどの部分が参考になっているのか、現在でははっきりと明言できない状況だからである。)

従って、ここに提示されている資料は、本稿を構築する上で、非常に重要な役割を果たした資料ということでもまとめた物である。その点は、ご理解いただきたい。

[#1]

ガンブラについては、Wiki 内「ガンブラ雑記」を参照のこと。

[#2]

「裏設定」や「考察」という言葉で実際に使われるようになったのは、これ以降の時代ではあるが、作中に登場していない様々な設定や、アニメ誌独自の解釈などが様々な形で登場したのが、ガンダムという作品の特徴である。これらのアニメ誌発の設定なども現在では多くが公式やそれに準ずる形で取り入れられているのである。

1): 模型 玩具関連資料

基本的に MSV 関連のインストラクションは、資料として用いている。また、MG 関連のインストラクションも資料として利用しているため、ここに提示した物以外でも利用した資料は多い。

- ・1/144 MSV プロトタイプガンダム組立説明書
- ・1/144 MSV フルアーマーガンダム組立説明書
- ・1/144 HG ガンダム組立説明書
- ・1/100 MG ガンダム組立説明書
- ・1/100 MG ガンダム NT1 組立説明書
- ・1/100 MG 陸戦型ガンダム組立説明書
- ・BB 戦士 フルアーマーガンダム組立説明書
- ・BB 戦士 ガンダム NT1 組立説明書
- ・プロトタイプガンダム限定配布版メカニカルファイル
- ・フルアーマーガンダム同梱メカニカルファイル

2): 書籍類

書籍類は、ほとんどが本論展開のため資料としてチェックに用いた物であり、ここでは極めて一部のみの提示となっている点をご了承いただきたい。

- ・ガンダムセンチュリー
- ・MS 大全集 98/2003/2006
- ・GUNDAM OFFICIALS
- ・SD クラブ (切り抜き多数)
- ・EB MS 大図鑑関連
- ・ガンダムヒストカ 5 号
- ・他多数。

導入

0-1: ガンダムと型式番号

TV 版機動戦士ガンダムに登場したモビルスーツ「ガンダム」に関しては、劇中登場の機体は、1 機であることは間違いない。しかしながら、番組放映時から、既に「ガンダム」が複数存在することは匂わされていたのである。^[#3] 実際、放映時、画面上ではガンタンク、ガンキャノンなどのパーツが複数登場し、それらがザクの攻撃によって破壊される描写が挿入されており、主役メカであるガンダムですらそういった機体群の一つに過ぎないという解釈はなされていたのである。^[#4]

TV 版の放映終了直後から、徐々に「ガンダム人気」が高まった事による、様々な媒体展開が行われ、富野由悠季 (当時は「善幸」名義) 監督による小説版では、TV 版とも異なったオリジナルの展開が行われるまでになっていた。

そして、この小説版ではアムロはガンダムを乗り換えており、主役メカであるガンダムですら、代替機が存在するということが作中で描かれているのである。(さらにいえば、それ以前のロボットアニメ関連ではほとんど有り得なかった、主人公メカの「破壊」についても描かれている。これは、アニメ版でも最終話で描かれていたわけであるが、ストーリーの最中に主人公メカが破壊されるというのはかなり珍しいことであろう。蛇足ながら、この描写がのちの戦闘メカ「ザブングル」における主役交代に繋がっていると筆者は考えている。)

一方、アニメ誌でも様々な特集が組まれており、中でも OUT、アニメックの特集は、他誌 (といっても、当時他に存在したアニメ誌は、アニメージュとアニメディアだけではあるが...) を上回る密度で展開されていた。アニメージュやアニメディア (これは厳密には劇場版のころの創刊である) の特集が主にストーリー展開に絞った物であった (実際、アニメージュではストーリー展開に合わせた別冊が刊行されていた) のに対して、この先述の 2 誌はどちらかといえば、設定面での充実を目指した展開が行われていたのである。

そしてこの流れから、設定面の充実と補足を行うという流れになり、アニメックの特集において、ついに「RX-78」という型式番号が、提示されるに至ったのだ。さらに、OUT では、当時のガンダムに関係したスタッフ等が刊行した同人誌をベースに、「ガンダムセンチュリー」という、後の世にバイブルとして扱われる書籍を刊行するに至った。

結果的にこの 2 誌の展開した記事や別冊が、現在のガンダム関連の基本となる設定群を生み出したといっても過言ではないのである。

多少脱線したが、これらのアニメ誌などの特集記事によって、ガンダムに型式が与えられ^[#5]、様々な設定が付け加えられ、現在の考察のベースとなる設定となっているのである。つまりは、現在の様々な設定の多くが「後付け」なのである。

例えば、アニメックの特集では、ガンダムに「RX-78」

[#3]

これは番組の企画案であったガンボイの時点でもすでに触れられている。

[#4]

この点に関しては、主役メカは 1 機という当時の風潮に作品展開によってうまく持ち込んでおり、脚本 (というか、描写か?) の妙ともいえるのではないだろうか。

[#5]

これを読んでいる人には既知の事実ではあるだろうが、実際には放映当時からガンダムに型式を与えているのである。「ガンダ X78」というものがそれであり、当初からそういった面は考慮されていたのである。

しかし、実際に日の目をみなかった設定であり、これを発展させたのがアニメックの特集なのである。

という型式が与えられ、他の MS にも同様に型式番号が与えられたのだが、これをさらに発展させたのがガンダムセンチュリーである。センチュリーでは、枝番処理することで、バリエーション展開を念頭においた記事となっている。そして、公式媒体^[#6]であるガンプラにもこの流れがフィードバックされ、1/100 で展開されたリアルタイプシリーズ^[#7]では、ボックスに型式番号が入れられるようになったのである。こうして型式番号とバリエーションの関係が受け入れられていき、ついに「映像媒体を持たない」ガンプラ、MSV シリーズが展開されたのである。

そして、MSV シリーズの中で、ついに「アムロのガンダム」以外のガンダムが明確な形で登場したのである。

MSV シリーズでは、そのインストラクションに様々な解説を掲載することで、映像媒体を持たないことによる不利を補っていた。このインストラクションでは、アニメックで設定された型式などの情報とガンダムセンチュリーで提示された設定などをさらに発展させた情報が掲載されており、ここにおいて「ガンダムが複数存在する」ことが明確にされたのである。

初めて登場した「アムロ機以外のガンダム」であったプロトタイプガンダムのインストラクションでは、「生産されたガンダムは 8 機」であったという記述であった。この記述は、センチュリーの記述がベースであると考えられ、以後、「ガンダムの生産数は 8 機」が定説となった。

MSV シリーズにおける「他のガンダム」、すなわち、フルアーマーガンダムについては、計画は存在していたが、実機の存在については疑問点が提示され、また、パーフェクトガンダムに関しては、その出仕もあり、存在の物に対して疑問符が付けられるような形で解説されたのである。この流れは、続く TV アニメ「機動戦士ガンダム」(以下、「ガンダム」)、「機動戦士ガンダム」(以下、「ガンダム」)においても同様であり、MSV の設定の系譜上の RX-78 型以外は登場すること

は無かった。^[#8]

しかし、MSV からおよそ 5 年後に製作された OVA「機動戦士ガンダム 0080 ~ ポケットの中の戦争」(以下、「ポケ戦」)において、ニュータイプ専用ガンダム、ガンダム NT-1 アレックスが登場し、一年戦争時の RX-78 型で初めて MSV で触れられた機体以外の「ガンダム」が登場したのである。

逆に言えば、このアレックスの登場によって一年戦争時におけるガンダムタイプ MS の迷走が始まったと言っても過言ではないだろう^[#9]。

アレックスは、当初ガンダム 4 号機として設定されたといわれており、実際、そういった資料も数多く目に出ることが出来る。(同時に、当初はポケ戦に登場する MS は、ケンプファーを除き、全て既存の MS のリファインとして当初画稿は起こされている。すなわち、MS-06FZ については、あくまで MS-06F であったのだ。)しかしながら、実際に OVA が販売される頃には、各種設定が固まっており、登場した MS は、全て「既存の機種のパリエーション」として設定されたのである。^[#10]

無論、アレックスも例外ではなく、「ガンダム 4 号機」ではなく、「NT 型」という新たなカテゴリのガンダムとして設定されたのである。

この設定の変遷は、当初ポケ戦のスタッフが、ガンダム 4 号機以降の機体の設定について、(厳密に言えば、MSV について)曖昧な状態で設定作業に入っていたためといわれている。これは、ある意味当然であるといえる。

というのも、元々ガンダムについては、フィルムが公式というスタンスがあり、MSV については、バンダイが権利上で展開したオリジナルシリーズに過ぎず、ガンダムにおいて、MSV の機体を(バンダイ側からの)リクエストと言われている)登場させたことで、初めて公式化した

[#6]

ここでいう公式媒体というのは、「バンダイ公式」である。サンライズにとって、Z ガンダムが放映されるまでは、MSV は準公式にすぎなかった。

[#7]

このリアルタイプシリーズでは、ボックスに型式番号が記載されており、以降 MS のプラモデルでは(設定されている限り)型式番号が併記されるようになる。

なお、蛇足ながらリアルタイプゲルググでは、設定が固まっていなかったこともあり、現在とは異なる「MS-11」が型式として表示されている。(これがその後の考察材料となったのは知っての通りである。)

[#8]

ただし、この頃既に模型誌でのオリジナルガンダムの製作はかなりの頻度であり、ホビージャパン誌の「ガンダムの別冊」には多くのオリジナルが登場していた。続くモデルグラフィックス誌の別冊でも同様であり、この時代の風潮ということでは出来るだろう。(この流れに対する一つのアンチテーゼとしてセンチネルは登場しているのだが、この件については、Wiki のガンプラ雑記を参照のこと。)

[#9]

当時から既に非公式作品ではオリジナルガンダムが登場してはいたのだが、公式にフィルムとして起こされた一年戦争時のアムロ機以外のガンダムとしては、アレックスが初めてであり、78 型の迷走はアレックスで始まったと結論付けて問題ないだろう。

[#10]

これには様々な説があるが、バンダイ側の販売上の理由と、そのデザインが余りにも元のラインと異なっていた点もあげられるだろう。

とされているのである。こういった状況であるため、MSVで追加されたそれぞれの機体解説をサンライズ側のスタッフが熟知しているとはいえ、センチュリーの編纂に関わったかつてのTV版ガンダムスタッフですら知り得ない情報が追加されていたりしたのである。^[#11]

このあたりの事情は、実はMSだけではなく登場したペガサス級の名称変更にも現れているのである。^[#12]

また、このポケ戦発売の1989年の後半には、SDクラブにおいて、「大河原邦男モビルスーツコレクション」(後のM-MSV)が展開され、ここで改めてガンダム4~7号機が設定されたことにより、さらに混乱に拍車がかかることとなったのである。この4~7号機は、それまで提示されていた4号機以降のガンダムに関して、問題となる部分を如何様にも解釈可能な解説文とともに提示されたため、結果的に様々な説が氾濫することとなったのである。

そして、後年OVA「機動戦士ガンダム第08MS小隊」が製作され、ついに「量産型ガンダム」(詳細は別項に後述^[#13])が登場し、フィルム上でも多数のガンダムが登場するに至ったのである。

この結果、M-MSVで混乱をきたしていた型式番号問題がさらに混乱することになったのである。

0-2: 考察の現状と問題点

前項のような経緯で「ガンダム」の増加と、型式番号の混乱が生じていたわけであるが、当初から様々な形でこれらの設定解釈は行われていた。

同人誌という形で公開がほとんどであったが、とくにインターネットが本格的に普及し始めた、1997年頃からWeb上で独自の設定考察を公開する人たちが多く現れるようになったのである。(筆者も、同人誌で俺ガンを公開するための一つの指針として俺説を展開して

いたが、1999年に現在のサイトの元となるサイトを立ち上げ、2001年から現在のサイトで公開している。)

そういった説を公開する作者の中には、閲覧者の大きな支持を受け、かつてのガンサイトの様に、一般的なコンセンサスを得てしまうような人も登場してきたのである。さらにそういった人たちの中から、実際の「ガンダム作品」の製作に関わるような人たちも現れてきた。

現状としては、Web上での考察に関して、厳密な意味での正当性は無い^[#14]。しかし、閲覧者の同意を受けられるような説であれば、それがネット上での定説になる可能性が高くなっている。そういった意味では、我々ユーザー側からの提示が、かつてのガンダムセンチュリーのように、逆提案の形で取り入れられる可能性もあるということなのである。(無論、そういった状態になるにはそれ相応の説が必要であるが。)

様々な説がWeb上で公開され、筆者も気になる考察は色々参考させていただいている。だからといって、その説をそのまま取り入れていってしまうのでは面白くない、というのが筆者のスタンスであり、多少暴走しようとも「内容として面白ければ有り」というのが、「新説/珍説プチ上げまShow!」である。

筆者の暴走に関して、同意できる面、出来ない面があると思うが、「隙間を突いた」解釈というものは、こういった物であるという一つの例として受け取ってもらいたい。無論、この考察は、筆者一人の物ではなく、掲示板などで意見のやりとりを行った数多くの方々の意見でもある。(巻末 Special Thanks 参照。)

一つの提示から、こういった新たな考察が誕生する...
...、これもまたWeb時代の考察の現状だと思うのだ。

さて、話題をRX-78関連に戻そう

現在、RX-78関連の考察に関しては、様々な書籍類でも型式番号と仕様の関係について、様々な考え方が

[#11]

このあたりは、ストリームベースの功績が大きいと言え、逆に言えば、ストリームベースの活動が模型誌側に限定されていたことから、設定の齟齬が起こったといっても過言ではないだろう。

[#12]

既存の資料を細解くと、ガンダム4号機については、明確な記述は存在していない。しかし、1989年に発売されたポケ戦の設定作業の時期は、おそらく後のM-MSVの設定作業の時期と多少なりとも重なっていた可能性は否定できない。そのため4号機の設定を慌てて変更したという感じに受け取れる。さらに、このMSVに対する情報の齟齬は、本文中でも触れているペガサス級にも現れているのである。登場するペガサス級は、当初「トロイホース」という艦名であるが、この艦は一年戦争では実戦には参加せず、輸送任務に就いていたという設定なのである。つまり、MSVから「トロイホース」という艦名を拝借したのだが、その設定についてはきちんとした情報が設定スタッフ側に無かったということだと考えられる。そのため、「グレイファントム」という艦名に変更されたのであろう。

[#13]

何故「量産型ガンダム」から「陸戦型ガンダム」に変更されたのか、については、アレックスと同様の理由である。

[#14]

Wikipediaの該当項目を読んでも編集者の考えとして述べられているに過ぎない記述も見受けられるため、それが全て正統であるとは言えないのである。(Wikipediaのガンダム関連の項目を見てもらうと判ると思うのだが、公式/非公式の区別を付けずに記述を行っている項目も多い。本サイトでは筆者の考え方で分類を行っているが、正当な物は、敢えて言うならば公式サイトだけであらう。

提示されている。

大きく分けると、「型式番号 = 仕様説」と「型式番号 = 機番説」である。一言で言ってしまうと、「前者有利で後者不利」であるのだが、それによって「型式番号は仕様を表す」と単純に結論づけることが出来ないのが、このRX-78 関連の問題点である。実際、様々な初期の記述類を読み解くと、既にその時点から、型式番号を仕様とも機番とも受け取れる記述が存在しているのである。

例えば、現在では型式番号を仕様として解釈する場合に重要な記述である 1/144 プロタイプガンダムのインストラクションの記述であるが、この記述こそ最初にガンダムのバリエーションについて触れた解説文であるわけだが、実は、「初期試作型」、「中間装備型」、「後期試作型」という形での解説がなされているだけであり、これがRX-78-1 ~ 3 を指すという記述は一切なされていないのだ。

このインストラクションの記述を発端に様々な書籍や考察などで、RX-78-1 ~ 8 の枝番に関しては、仕様を表すという解釈が通説となったわけであるが、記述からすると、最低限上記の「仕様」と型式番号については、別物であるとしなければならないのである。(詳細は、考察本文中で触れる。)

無論、通説である「型式番号 = 仕様説」を否定するわけではないのだが、筆者個人としては、完全に納得がいかない部分がある。上記のような理由で存在するのである。

まず、第一に引っかかっている部分が、「未だ持って「8号機」の存在が明らかではない点である。一時、RX-78-8 という型式(この場合、実質的な機番だが、これは後述する)を見ることがあったが、その辺りの解が未だ見あたらない部分に関して微妙に引っかかっているのである。(なお、この8号機に関しては、単に未発表と一刀両断してもいいのだが、それだけでは考察としておもしろみがないと感じている。すなわち、「未発表の理由」を考えるのもまた一つの楽しみ方だと思うのだ。)

そして、第二の引っかかりが、枝番が仕様番号だとした場合、何故改修点の多い4号機の型番が、ほぼ同型の5号機より若いのか、という点である。

他にも細かい部分では、色々あるのだが、大まかにまとめると仕様説には以下のような問題点が存在すると考えられる。(繰り返しになっている部分もあるが、論説中の記述なのでご容赦いただきたい。)

単純に型式 = 仕様とした場合の問題点

1. 8号機の存在はどうなったのか、又、その仕様はどのような形だったのか?
(かつて見られたRX-78-8 というナンバーは、何故近年

見られないのか?)

2. 何故4号機の方が、仕様の的には古い番号の機体でありながら、当初完成しながら、さらに改修されていたのか?

(冷却フィンが異なるのは、ジェネレータの出力アップに伴う、冷却装置の改修の結果とされている。ならば、ジェネレータの改修前は、5号機と同型だった可能性も残るのである。つまりは、RX-78-5 からRX-78-4に改修された、という形になってしまう。)

3. 上記に絡んで、何故、4、5号機は似た仕様でありながら、別形式を振られているのか?
(それこそ、RX-78-4A、RX-78-4Bといった型式になると考えられるのだが.....)

4. あれだけ形状の異なった4~7号機が、他のRX-78型の様に、アルファベットによる分類(78NT1などのように、78B、78Cといった区分)にならなかったのは何故か?^[#15]

以上の4点が、筆者として「型式=仕様」と単純に決定づけることが出来ない理由である。

逆に「型式 = 機番説」をとった場合、次のような問題点が存在する。

単純に型式 = 機番とした場合の問題点

1. 8号機の存在はどうなったのか、また、その仕様はどのような形だったのか?
(実は、この問題は機番説でも同様である。)

2. 1~3号機の改修経緯を見ると、同じ型式の機体が複数あるように受け取れてしまう(これは、プロタイプガンダムのインストラクションの解釈によるのだが、塗装チャートなどから否定することは難しい。)

3. 各作品の描写は異なるのだが、4~5号機は、M-MSVの機体と後のゲーム登場の機体が同一と考えられる。しかし、6号機に関しては、M-MSVの機体とゲーム登場の機体を同一機とするには情報が不足している。つまりは、同じ型式の機体が複数存在する可能性が残る。

4. 実戦に投入された可能性が指摘されている4~8号機のうち、7号機がM-MSVで実戦未投入とされている点。

この場合もやはりネックとなる部分が存在しているのである。(本ページ前出の脚注にも関連する部分が多い。)

[#15]

この点については、M-MSVの当時から疑問点として残っていた。実際、M-MSVの解説は、RX-78-4~7は、いずれも再設計機のように受け取れ、機番 = 型式番号としか受け取れない形の解説であったため、この混乱は起こったと思えるのだ。素のRX-78に近い形状の機体を枝番処理するという理屈ならば、RX-78XXやRX-78NT1も枝番処理されていてもおかしくないレベルである。

これまでRX-78系列の型式番号を考察する場合、多くが「機番」あるいは「仕様」のみに拘ってしまい、それが故にどうしても「捨てざるを得ない」部分が生じていた。また、一つの考え方がコンセンサスを得るとどうしても「一般的に「だから、機番（或いは仕様）説はありえない」という固定概念にとらわれがち傾向を見せることが多かったように思われる。

これは、コンセンサスを得た説に対する対論が受け入れられにくいことを如実に表していると思われるが、本論では、あえてこういった一般的な考え方とは異なった方向でアプローチをしていきたいと考えている。

すなわち、現在の主流の考え方である「機番 = 仕様説」に対して、あえて「機番 = 機番説」を持ち込んでみようと考えているのである。つまりは、実は、RX-78-1 ~ 8 というナンバーは型式番号だけではなく（機体）登録番号としても存在しており、これらが両立している」という形で、両論を成立させようという暴論なのである。

一般的に機体の機番（或いはロットナンバー）というものは、型式番号とは異なる物であるが、これをあえて「同じ番号であった」と解釈するのである。

すなわち、結論から述べてしまうと、当初、RX-78型として建造された機体は、RX-78-1 ~ 8 という機番で登録されて、各々の仕様が固まってくるに連れて、RX-78-1 ~ 7 という型式番号が登録された、.....という考え方である。（すなわち型式番号と、登録番号のダブルナンバーと考えるというのはどうだろうか、という提示である。） ^[#16]

個人的に、「RX-78-1 ~ RX-78-3 というのは仕様である」という解説に異論を挟むつもりはない。むしろ、その方が説明しやすいのは事実である。しかし、RX-78-4 ~ RX-78-8 は機番説との折衷案でなければ説明しづらいと感じているのである。これを単に仕様と一刀両断してしまうと、様々な形で問題点が生じてしまうのは先述のとおりである。

いずれにせよ、暴論には変わりないが、楽しんで頂ければ幸いである。

なお、以下、本論で仕様を表すときには、78-1 仕様 / 78-2 仕様（或いは、RX-78-1 仕様、RX-78-2 仕様）という形で、機番を表す場合は、78-1 番機 / 78-2 番機

（RX-78-1 番機、RX-78-2 番機又は、ガンダム 1 号機、ガンダム 2 号機）というような記述法で記述している。

また、各種資料に関しては、基本的に該当部分の引用にのみ止めているが、プロトタイプガンダムのメカニカルファイルに関しては、その入手が現在では極めて困難であることから、巻末に全文引用の形で掲載させていただいた。必要に応じて、チェックをしていただきたい。

蛇足ながら、以下の本文は、論文調でまとめているため、出典など視聴者視点のものについては、省略している。そのため、文章の出典を歴史資料として、また、イラスト類を写真とした形で記述を進めている。

よって、それら細かい記述については、その都度脚注でフォローすることとする。

1. 初期に建造されたRX-78型

いわゆるRX-78系列のうち、最も初期に建造された機体は、8機であるという解釈については、様々な資料 ^[#17]から異論を挟む余地はないだろう。これら8機は、ジャブローでロールアウトした機体であり、1 ~ 3号機は実戦対応のための改修が行われた後ルナツーへと移送され、4 ~ 8号機は冷却装置などを持たない状態で量産型MS（後のRGM-79）の母体となつたとされている。

ただし、ここでいう8機とは、後に存在が確認されたRX-79型 ^[#18]や各種RX-78型から鑑みるに、「MSとして（ジャブローで完成した）最初のRX-78型」と解釈するのが妥当であろう。実際、原文を見るに「ジャブローで製作されたRX-78の総数は8機」であり、実際にMSとしてロールアウトしたのが8機であり、建造されていたパーツ群などは考慮されていないことが判るだろう。

RX-79型については、V作戦を経由しないMS開発計画によってプランニングされたMSといわれているが、一方では、RX-78の開発において要求水準を満たしきれなかったパーツ群を流用して開発された機体群であるという説も存在する。現状では、いずれを否定するにも論説の強度としては不十分であるため、逆に考えて、いずれの説も満たす方向で考慮していった方がいい

[#16]

この考え方自体は、以前からぼんやりとあった（RX-78が仕様説だけならバランスが悪いと考えていた）のだが、Gガンダム関連の資料をまとめている際に、考え方の方向性ができたものである。

Gガンダムにおいては、同じ機体に異なった「登録番号」が、当てられていることがある。また、同様に国における型式とガンダムファイトの登録番号が異なることも当たり前のことである。

仮にドモン・カッシュがライジングガンダムでガンダムファイトに参加した場合、この機体がGF13-017NJと登録されたことは間違いないとおもわれる。この考え方に至ったときRX-78に応用が可能と考えたのである。

[#17]

MSVプロトタイプガンダム解説書他、多数の資料で確認できる。

[#18]

ここでいうRX-79型とは、RGM-79のプロトタイプとしてのRX-79型だけではなく、一般的に陸戦型ガンダムと呼ばれる機体などのことである。

いだろう (この内容については、後述する RX-79 型の項で解説を行う)

実際の RX-79 型の開発経緯が、新造機体であるにせよ、RX-78 の余剰パーツ流用機であるにせよ、RX-79 型のうちで陸戦型に分類される RX-79[G]が少なくとも20機以上は製造されていることから、同じ試作機として開発が進められた RX-78 型がわずか8機だけではなく、相当数のパーツ群が製造されたという形で解釈することはなんら問題ないだろう

さて、RX-78 の (パーツを含めた) 総生産数はかなりの数である、という前提を行った上で、ここから初期型 RX-78 について、様々な面から考えていってみよう

初期型 RX-78 が8機ロールアウトしたことは、先に触れている。このなかで、初期の RX-78 型というと、一般的にはアムロ・レイ少尉の運用した RX-78-2 や RX-78-1 プロトタイプガンダム、RX-78-3 G-3 ガンダムなどがまず思い浮かぶであろう

実際、この3種の機体は、極めて初期の資料から確認できるものであり、少なくとも3機の RX-78 の所在については、はっきりしているといえるのである。

残りの4～8号機に関しては、初期に確認された資料では、いずれも存在は明らかであったが、その運用に関しては、不明な部分が多かった。

しかし、後に確認された資料では、初期に発見されていた資料の記述を裏付けるような「改修後」の78-4～7号機の姿が確認され、その運用についても記述が得られているのである。(ただし、8号機に関しては、未だ情報が確定していない。)

これらの「セカンドロット」機については、別項で語ることとして、ここでは1～3号機と改修前の4～8号機を中心に述べていこう

1～3号機については、初期の資料からその存在と、いかなる運用が行われたかはっきりしている部分が多い。ところが、この1～3号機について、いかなる型式であったか、という点については、実ははっきりしていない部分も多いのである。

先に述べた3機は、それぞれ型式がバラバラであるが、この型式についても実は、複数の資料から導き出された内容に過ぎず、一つの資料でこのデータをきちんとした形で残しているものは、実際には皆無に近い状態なのである。^[#19]

また、型式が触れられていないものの、明らかな初期

段階の RX-78 と思われる写真や記述が見られる資料がわずかながら存在している。一般的には「トデモ」として切り捨てられそうな資料以外にもそういった写真を見ることが出来、また、こういった資料であっても場合によっては、非常に重要な役割を果たすことがある。そのため、取り上げられる物については、それぞれまとめていくスタンスを取っている。

それでは、まずはそれら初期型と思われる記述や写真についてまとめていってみよう

まず、最も有名である RX-78-1 プロトタイプガンダムに関する資料^[#20]には、数点の写真(1号機と2号機のいわゆる RX-78-1 仕様のもの)と連邦軍の MS 関連 (RX-75 系列のもの)の記述、そして RX-78 型の記述が記載されている。

この資料には、以下の記述を見ることが出来る。

(引用1)

ジャブローで製作された RX-78 の総数は8機で、内1～3号機はサイド7へ、残り5機は、その機能と形状から初期試作型として、中間武装型、後期試作型(3号機仕様)と区別される。これらはほぼ素体のままで種々の冷却システムを持たぬまま RGM-79 の母体となった。改装中であった4、5号機は星1号作戦においてホワイトベース級2番艦サラブレッドに搭載されたとあるが、正式に確認できる資料は現存していない。また6～8号機の参戦記録等も残されていない様である。

この資料は、一年戦争の勃発間もない時期を UC0077/7 月としたり、RX-75 のコアブロック搭載型の原型機が、同じく UC0077 年にロールアウトしているなどの一部現在確認されている資料類とは整合性に欠く部分も存在しているのだが、全体的に見て、これらの部分を考慮して時系列を修正していけば、十分信頼に値する資料であることは間違いないだろう

引用したこの記述は、資料の末尾部分の一文であるが、一見しただけで非常に重要な記述であることが判らるだろう

そこで、まずこの記述を簡単に箇条書きにしてみたのが以下である。

1. ジャブローで製作された RX-78 は、8 機
2. 1～3号機はサイド7へ、残りはジャブローに
3. 5 機は、RGM-79 の母体となった
4. 5 機は、3 種に区別できる

[#19]

実のところ、GUNDAM OFFICIALS が、MSV のインストラクションなどをベースに一つの説として形にしてはいるのだが、実際には不完全なものとなっているのである。OFFICIALS では、既存のバンダイ製プラモデルや講談社、角川書店などの書籍類の情報をまとめた物ではあるが、文意の解釈は、より当たり障りの無い形になっており、好意的解釈の部分も多い。

無論、それは多くの資料を編纂する上では非常に重要なことであり、この編集方法が正しいと言えるのだが、重箱の隅をつつき始めると、やはり、「ここはこう解釈したほうがいいのでは」という部分がどうしてもでてくるのである。

[#20]

1/144 プロトタイプガンダムのインストラクションのことである。

5.4, 5号機はサラブレッドに搭載された
6.6 ~ 8号機の参戦記録は残っていない

1, 2, 3については、従前からあるRX-78 関連の説
ではいずれも取り入れられている内容であるため、詳細
は省略する。

ここで問題となるのは、4, 5, 6の3つである。

まず、4の4および5号機についてであるが、これに
関しては、後に発見された資料^[#21]で、実際に運用され
ていた事実が確認されているため、特に問題は無いだ
ろう。また、6についても、6号機は実戦投入されてお
り、また、7号機についてもプランニングは確認されて
いる。これらについては、他の資料の内容を含め、
RX-78 後期型の項で説明するので、ここでは省略する
こととする。

さて、問題は、「4」の4 ~ 8号機は、3種に区分でき
るといふ記述である。実は、箇条書き部分では、「4」のよ
うにまとめたのだが、引用文を見てもらうと判るように、実
はこの部分、文章として非常に曖昧な状態であり、実際
にはこの3種というの、4 ~ 8号機のことではないと
考えられるのである。^[#22] というのも、「初期試作型」、
「中間武装型」、
「後期試作型(3号機仕様)」の部分で4 ~
8号機の記述と考えると、その後続く文章、「これらは
ほぼ素体のままで(中略)RGM-79の母体となった」と、
整合性がとれないのである。

つまり、「その機能と(中略)と区別される」という部分
では、「3号機仕様」という仕様が登場していることか
ら、この部分は実際には、1 ~ 3号機に関するものであ
り、その後の「ほぼ素体のまま」というのは、4 ~ 8号機
を指すことは、文意からして間違いないと考えられるの
である。(ところが、これを明確に示した資料が実は現時
点では存在していないのである。ここが、RX-78の型式
を考える上でのネックではあるのだが.....)

また、この文章からさらに問題点を指摘することがで
きるのである。

繰り返しになるのだが、引用文をもう一度見てもら
いたい。文章は「残り5機はその機能と形状から初期試作
型として、中間武装型、後期試作型(3号機仕様)と区

別される」とまとめられているのである。

すなわち、「初期試作型に中間武装型と後期試作型
が含まれる」のか、「初期試作型、中間武装型、後期試
作型の3種が存在する」のか、が文意から取りにくい
のである。

また、先ほどは否定したが、この文章が、ジャブロー
に残された5機のRX-78のことを示している場合、「5
機のRX-78は、初期試作型であり、中間武装型と後期
試作型とは区別される」という解釈も可能となってしまう
のである。つまりは、3通りの解釈が出来てしまうのが、
この文章の最大の問題点でなのではないだろうか。

ここでいずれの考え方を取るか、という点に焦点が移
るのだが、ここで提示したい写真が存在する。手元にそ
の資料がある人は確認をしていただきたい。

別の資料に極めて初期のRX モビルスーツを撮影し
た写真が存在するのである。^[#23] この写真に写っている
RX-78は、我々が知るどの型式のRX-78とも異なっ
ているのである。

特徴的な部分として、頭部V字アンテナが無く、ま
た、腰部ヘリウムコアも存在していないことがあげられ
る。引用文をみると、4 ~ 8号機は、「ほぼ素体のまま
で種々の冷却システムを持たぬままRGM-79の母体と
なった」とされている。

その点から考慮すると、ヘリウムコアなど様々な装備
が施されていない、この写真の機体こそが、いわゆる
「素体」であり、RX-78としての型式が与えられた直後
(あるいは、その前段階のX-78と呼ばれる機体である
可能性も否定はできないが、X-78についてはさらに詳
細なデータがないため、現時点では考えないこととす
る)と考えられるのである。

すなわち、ここから考えるに、やはり「初期試作型」、
「中間武装型」、
「後期試作型」という3つの区分は、1
~ 3号機において別に存在すると考えるのが妥当では
ないだろうか?^[#24]

さて、ここで改めて1 ~ 3号機の仕様について記述
した部分を前出の資料から引用してみよう

[#21]

「宇宙、閃光の果てに...」のこと。

[#22]

この解釈については、筆者個人の考え方のみならず、ルロイさんの考察が非常に大きく影響しています。特に、文意の取り方については、ルロイさんのインストラクションの解釈を参考にさせていただいています。

[#23]

この写真とは、ガンダムセンチュリーに掲載された初期型RX モビルスーツのイラストのことである。
このイラストのRX-78に関しては、初期状態であるという点以外、情報はなく、型式も明らかにされていない。

[#24]

ちなみに後にガンダムヒストリカで、完成直後のRX-78のイラストが書き下ろされたが、このイラストは完成直後、あるいは78-1仕様への改修直後の状態と考えている。正面に描かれている機体が3機であることから、画で後ろに描かれている機体は、素体のままと解釈している。

引用 2)

原型 1 号機には徹底した軽量化が図られ、続く 2, 3 号機と共にサイド 7 へ運ばれた。宇宙空間での戦闘に絶えられべく、腰には冷却ユニット等が設けられ、大気圏突入能力もあわせて与えられている。(中略) 1, 2 号機には同仕様の改修が施され、(ジャブローで工作終了)テストは順調に行われた。当初はビームライフルの腕への一体化が考慮されストラップ付きのハンドショットガンスタイルのビームライフルが実験に使用され、右腰にはそのためのホルスターが設けられていた。遅れてサイド 7 に運ばれた 3 号機からは簡略化(と言うより無駄の整理)がさらに計られ、ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられたので 1, 2 号機は間もなく 3 号機仕様へ若干の改造を受けている。(後略)

この文章を読んだ限りでいえば、ポイントは 1, 2 号機と 3 号機では、改修されたタイミングが異なっている、という点であろう。また、ビームライフルの記述についても面白い特徴がみられる。

さらにこの部分に続く部分に以下の記述が存在する。以下の記述と前出の引用とをまとめて考慮する必要があるだろう。

引用 3)

サイド 7 で実用試験を行っていた 1 ~ 3 号機の内 2 号機はペガサスへ搭載され、アムロ少尉の活躍により戦後も数多くの功績が認められている。サイド 7 で奇襲によって RX モビルスーツはすべてが失われたとされているが、その後の調査で 3 号機がほぼ無傷で発見され実戦参加していることが確認されている。星一号作戦の際マグネットコーティングを受けたとあり、機体をグレーとライトグレーで塗り分けた写真も発見されている。しかしながら機体は 2 号機同様発見されず、アムロ少尉が乗り換えたとする説も強い。

この記述から、従前から言われているように RX-78 の 2 号機がアムロ・レイ少尉(当時)の搭乗機であることは間違いがない。また、「2 号機(およびペガサス^[#25])に搭載された RX-77, RX-75)以外の RX タイプモビルスーツは、全てサイド 7 で失われたとされていたが、RX-78 の 3 号機がほぼ無傷で発見されている」点も記述されている。この 3 号機こそが、今日で言われる「G-3 ガンダム」であることは、機体色などからも間違いのないであろう。

しかし、この 3 号機の記述と、前出の引用 2 の記述とを組み合わせると、少々腑に落ちない部分が出てくるのである。

すなわち「3 号機仕様」という言葉である。

現在、一部論説ではこの 3 号機仕様を「RX-78-3」仕様と解釈する部分がある。しかしながら、引用 2 をもう一度見直して欲しい。問題となるのは、「ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられたので 1, 2 号機は間もなく 3 号機仕様へ若干の改造を受けている」という記述である。

現在の定説として、1 号機は RX-78-2 仕様に改修後、ジオン軍の強襲によってサイド 7 で失われており、RX-78-3 仕様への改修は行われていないのである。逆に言えば、この時点で 3 号機仕様となっていると解釈すると、RX-78-3 仕様は、「RX-78-2 仕様にマグネットコーティングを施した物」では無くなってしまおうのだ。

また、引用文を読んでもらうとわかるのだが、3 号機仕様への改修のポイントとなっているのが、ビームライフルの形式なのである。一般的に RX-78-3 (G-3 ガンダム)の運用したビームライフルの形状は、RX-78-2 の物と変わらない。(無論、内部的に変更があった可能性は否定できないが、引用文で示されているような「形」の変化ではないことは明らかである。)すなわち、引用文中の 3 号機仕様と RX-78-3 仕様(マグネットコーティング)とは無縁なのである。^[#26]

このことから、ここで言われる「3 号機仕様(前出の引用 1 と組み合わせると後期試作型)とは、RX-78-3 仕様ではない」ということが確定する。

では、この 3 号機仕様とは、どういった仕様を指すのか。そこで注目してもらいたいのが、やはり、ビームライフルに関する記述なのである。

繰り返しになるが、3 号機仕様に関しては、「遅れてサイド 7 に運ばれた 3 号機からは簡略化(と言うより無駄の整理)がさらに計られ、ビームライフルの外部形式も 3 号機仕様にあらためられた」という記述が見られ、その前の「当初は(中略)ホルスターが設けられていた」という、いわゆる「RX-78-1 プロトタイプガンダム」の外形と一致する記述から、「3 号機仕様こそが RX-78-2 仕様」であると考えられるのである。

では、中間武装型とは...と考えると、本文中の記述から、これこそが RX-78-1 仕様であると考えられるのである。そして、初期試作機という区分こそが、「原型 1 号機には徹底した軽量化が図られ」という記述から、この「軽量化前」の仕様であると考えられるのである。(つまりは、意味的には「素体」と等しいと言えるだろう。)

この様に考えると、その前後の 1, 2 号機の記述と 3 号機の記述が整合性がとれ、「3 号機仕様 = RX-78-3」仕様と考えた場合の本文中の記述の矛盾点が解消されるのである。

[#25]

現在では、ホワイトベースであるというのが定説となっている。

おそらくこれは就航 1 番艦であるホワイトベースとクラスネームであるところのペガサスからきた混乱であろう。

[#26]

実は、多くの考察系サイトは、この部分を見落としている。

この論説をもう少し進めよう

3号機仕様という言葉と同様に、3号機にまつわる仕様を表す言葉に、RX-78-3仕様以外にも一つの記述法を現在見ることが出来る。「G-3仕様」というものがそれである。このG-3仕様は、今日では「RX-78-3仕様」と同義として解釈されている。つまりは、「G-3」をRX-78-3と同義に扱っているという解釈でもあるといえるのだ。ただし、この考え方には注意すべき点も存在する。

このG-3という言葉は、いわゆる「Gナンバー」であり、RX-78に与えられた機体ナンバーのことである。この「G-3」を単に仕様を表す言葉として解釈すると様々な面で既存の資料との不整合をもたらすのである。ここで別の資料^[#27]からの引用を次に記載する。

(引用4)

RX-78の名を冠して製作された8機のガンダムの内、1～3号機は改修工作と実用試験のためルナツーへ運ばれた。これらは呼称としてG-1～G-3ガンダムという名が与えられており、G-2はホワイトベースへ搬入、ニュータイプパイロットアムロ・レイ少尉によって数々の戦績を残している。G-1は奇襲攻撃で失われ、G-3は後にフィールドモーターにマグネットコーティングを施した形で実戦参加している。残る5機はジャブロー工廠から宇宙へは運ばれず、RGM-79生産のための母体となったが、後にGナンバーの仕様に武装されている。4・5号機はサラブレッドに搭載、残る6～8号機も参戦したらしい記録が確認されているが、実際にどの程度まで仕上げられて実戦に投入されたかは実機が回収されていないため、不明である。これらの試作機は実働途上だったFSWSに参入される予定もあった。

この資料2は、先の引用1～3とは別の資料であるが、記述内容に関しては、ほとんど同じものである。異なる部分は、「1. 1～3号機にG-1～G3という呼称が与えられた」、「2. 6～8号機も参戦したらしい」、「3. これらの試作機はFSWSに参入される予定も

あった」といった部分である。

つまり、ここで記述されているように、すくなくともG-1～G3という呼称は、機体に与えられた「機体コード」であったということなのである。このことから、単純に「G-3仕様」という言葉をRX-78-3仕様と片付けるわけにはいかないことが判るだろう。^[#28](ただし、「G-3仕様」がRX-78-3仕様では無い、と言っているわけではないので、念のため。)

現在、G-3(この場合は、機体としてのG-3ガンダム)については様々な記述を見ることが出来るが、いずれにせよアムロ少尉の搭乗機をG-3と断定するのは無理だということになる。また、3号機に乗り換えたとの説も存在するが、引用3の3号機のカラーリングの記述から考えると、実際にアムロ少尉の搭乗した2号機は、カラーリング変更を行われずにア・バオア・クー海戦によって失われていることから、3号機に乗り換えなかったことは判ってくる。逆に言えば、3号機仕様の機体に乗り換えた(実際には、機体そのものがバージョンアップした、ということのだが)、という事実が一人歩きした可能性は否定できない。^[#29]

(なお、後年発見された資料^[#30]によれば、ペガサス級5番艦ブランリヴァルにて3号機と思われる機体が運用されている。)

すなわち、「アムロ機は、RX-78-2仕様から、RX-78-3仕様へと改修されたが、機体は最後まで2号機を運用した」と考えるしかないのである。

さらにこの引用4では、4～8号機が、「後にGナンバーの仕様に武装されている」という記述をみることが出来る。

この記述をどのように解釈するかが、一つの問題ではないだろうか。すなわち、「G-4、G-5...G-8という仕様を与えられた」と解釈するか、「G-1～G-3が改装された仕様に残り5機も改装された」と解釈するかの問題なのである。

ここでまた異なった資料^[#31]よりの引用文を掲載する。

[#27]

限定配布されたプロトタイプガンダムのメカニカルファイルからの引用である。

[#28]

さらに補足すると、1/144プロトタイプガンダムのインストラクションの塗装ガイドでは、1号機の胸部にG-01、2号機の胸部にG-02が見える。すなわち、RX-78-1でありながら、G-02が与えられているのである。このことから、Gナンバーを仕様と簡単に言うわけにはいかないことが判るだろう。

[#29]

ここでは、小説版の記述を異説として考えた形で本文を記述している。小説版では明らかに乗り換えているわけであるが、その内容もあり、パラレルである。解釈としては、「異説」とするしかないだろう。

[#30]

「ガンダム・ザ・ライド」のこと。

[#31]

MIAプロトタイプガンダムのデータシートより引用。

(引用 5)

連邦軍の科学技術の粋を集めた RX モビルスーツの中でミノフスキー粒子下での対モビルスーツ戦を視野に入れ、白兵戦用機として開発されたのが通称「ガンダム」である。中でも試作機のまま実戦に投入されたタイプ 2 のアムロ少尉機に対して最初期に完成したいくつかのタイプ 1 モデルを総称して「プロトタイプガンダム」と呼んだ。

(中略)

このタイプ 1 は、ジャブローで 8 機ほど生産されており、後にタイプ 2 へ全機とも改修されている。

この資料 3 は、先に示した資料 1, 2 より先新しい資料である。資料 1 より先およそ 20 年後に発見された資料^[#32]であり、様々な新事実も確認できる資料である。

ここで新たな仕様と思われる記述が登場している。

タイプ 1, タイプ 2 がそれぞれ、原文からの解釈に依れば、タイプ 1 がプロトタイプ (= RX-78-1 = 中間武装型) であり、タイプ 2 がアムロ機の仕様 (= RX-78-2 = 後期試作型) ということになる。

そして、「タイプ 1 は、ジャブローで 8 機ほど生産されており、後にタイプ 2 へと全機とも改修されている」という記述が存在することから、1 ~ 8 号機全てが RX-78-1 及び RX-78-2 仕様の状態が存在したということになるのである。

また、後の改修後の機体のうち、4 号機に G-04, 5 号機に G-05 のコードが与えられているのが確認できる。

4 号機および 5 号機が運用された状況を記した資料は、実は複数の記載が存在しており、4 号機が失われた記述、5 号機が失われた記述、両機とも無事であっ

たという記述の 3 種類^[#33]が確認できる。しかし、いずれにせよ 4/5 号機の運用がなされていたという事実は変わらないといえる。ここで重要なポイントとなるのは、4/5 号機を運用していたサラブレッドの機体コールのコードである。サラブレッドでは、この G-04, G-05 は、運用時のコールサインとして用いられており、搭載のガンキャノンが C ナンバーでコールされていたことと合わせて考えると、機体そのものをコールする際に G ナンバーが用いられているといえ、仮に G ナンバーが仕様を表すコードとした場合、複数機体が存在する可能性のある G ナンバーを機体コールに使用するとは考えにくいのである。

そして、引用 4 の 1 ~ 3 号機の記述から考えるに、同様に機体に与えられた機体コードだと考えられるのである。

この考え方は、実のところ第 13 独立戦隊ホワイトベースで用いられた機体コードと同じものなのである。

ホワイトベースでは、RX-78-2 を一般的には単に「ガンダム」と呼称し、RX-77-2 を当初は「ガンキャノン」、2 機運用体制になってからは「C108, C109」でコールしている。つまり、「ガンダム」は、運用部隊が限られていたため、どの部隊においても基本的にコールは「ガンダム」あるいはそれに準ずるコードであったと考えるのが妥当であろう。そして、複数の「ガンダム」を運用する際に初めて機体コールのためのコードが必要となってくるのである^[#34]。その点で言えば、サラブレッドでは、ガンダムが 2 機体制であることから、機番をそのままコールコードに利用したのである^[#35] (でなければ、部隊ごとにコールサインは変わっていてもおかしくないのだ。)

ここから先は筆者の想定も幾分含まれるのだが、確

[#32]

プロトタイプガンダムのプラモデルの発売からおよそ 20 年後に MIA のプロトタイプガンダムは発売されている。

[#33]

4 号機が失われたのが「宇宙、閃光の果てに...」であり、5 号機が失われたのが「シークレットフォーミュラ (M-MSV の小説)」である。両機とも帰還したのが、「宇宙、閃光の果てに... if」である。

実は、「宇宙、閃光の果てに...」、「同 if」はグラナダ戦線が描かれており、「シークレットフォーミュラ」ではア・バオア・クー戦線が描かれている。そのため、解釈によっては、4, 5 号機が複数存在するという解釈も可能ではあるのだが、パイロットが同名であるということから、今回の考察では、どちらかといえば、現在主流である「宇宙、閃光の果てに...」を中心に考えている。

[#34]

とはいえ、実際に部隊運用を行っている場合、単機であろうとも通信コードとして機体コードを用いることは半ば当たり前である。その点から考えると、ホワイトベースの「ガンダム」は、G-2 (G-02) といったコードで呼称されていた事は十分考えられる。

なお、ガンダムのマーキングに WB02 や 102 などが存在するが、これをそのまま機体コードとすることは筆者としては反対である。

[#35]

G ナンバーを仕様とする説を採る場合に、ガンキャノンの C ナンバーや 78-2 号機のマーキング (WB02, 102) 等を例示する場合があるが、筆者はこれだけでは弱いと思っている。例えば、戦闘機などでも複数の機番を示すマーキングが存在するが、実際のコールサインはそれら機番のマーキングではなく、機体そのものに与えられたコードで行われるのである。一般機よりもむしろ実際の試作機でのコールサインは、機体そのものに与えられたベットネームを用いることが多いのである。

一方、ガンキャノンのコードは、試作機ながら比較的多数生産されたガンキャノンの識別のために与えられたコードであり、これが機体ナンバーを示すか、所属コードを示すかという資料は実は「存在していない」。つまり、この C ナンバーを部隊所属ナンバーと単に断定することもできないのである。(RX-77 全体の生産番号の可能性もあるのだ。)

認められた4/5号機にG-04, G-05という呼称が与えられており、さらに1~3号機には、G-1~G3という呼称(実は、マーキング類を合わせると、G-01~G-03という表記も見られる)が与えられていることから、おそらく初期に建造された8機には、それぞれG-1~G-8(G-01~G-08でも可)という機体番号(機体名)が与えられていたということであろう。つまり、G-1~G8=78-1号機~78-8号機、ということである。

ここで筆者から一つの疑問を提示したいのだが、G1~G8というGナンバーの割り振りは、単に現場で行われた物だろうか？

筆者は、おそらく異なると思うのである。型式番号(後述するが、この時点では、おそらく単に「RX-78」)が同じ試作の機体で、このような呼称がわざわざ付けられるというのは、やはり機体ごとに何らかの区別を行う必要があったからではないかと思うのである。

RX-78は、連邦軍の主力MSの開発のための試作機であり、完成した8機がそれぞれ別のテスト目的を持っていたとしてもおかしくないのである。実際、1~3号機と4~8号機では、その目的が異なっていたことは、引用1などからあきらかであろう。つまり、1~3号機は、実戦型MSの為の運用データ収集、4~8号機は、量産型MSのための機体構造等の検証機と考えるとスマートだろう。

すなわち、Gナンバーは、各機ごとのテスト項目やその運用などに対する識別のために与えられた機体コードである可能性が高いということなのである。

さらに、4~8号機は、後に確認できるその機体が、1~3号機の機体構造と大きく変わっている点は、RGM-79の開発計画が順調に進んだ時点で、再設計が行われたと考えるのが現状我々が得ている資料から推察できる最も無難な解だと考えられるのである。

このように考えると、Gナンバーは、初期のRX-78に対して各種のテスト、あるいは、各種の仕様のデータ収集のために与えられた「機体名そのもの」と考えた方が都合がいいのである。(実際の機体名は、ガンダム1号機~ガンダム8号機といったものであろうが、その通称がG1~G8であったと考える方がいいだろう)

さて、ここで先に挙げた「G-3仕様」について、ちょっと考えてみたい。

これまで説明してきた内容の場合、G-3、すなわちガンダム3号機は、ロールアウト後、先に触れた中間武装型を経由した後、後期試作型仕様(3号機仕様)として改修されている。そして、ここでいう後期試作型仕様は、形式で言うところのRX-78-2であることも触れた。

しかし、一般的な解釈によるところの「G-3仕様」とは、形式で言うところの「RX-78-3」なのである。無論、「G-3仕様」が形式で言うところの「RX-78-2仕様」であったと考えてしまってもいいのだが、G4計画における開発機や4号機以降のセカンドロットがマグネットコーティングを行っていた可能性が高いことから考えても、やはり一般的な解釈同様「G-3仕様 = RX-78-3仕様」と考えるのが妥当であろう。つまり、「3号機」を表す仕様というものが、複数存在したということも言ってしまうので

である。これは、こういった仕様論で考えるとスマートではないのであるが、この問題を解決する方法が無いわけではない。つまり、「3号機仕様」という仕様は、当初用意された仕様であり、「G-3仕様」という仕様は後に追加された仕様であると考えるのである。

少々わかりにくい言い回しなので、もう少しこの考え方を進めてみよう。初期のRX-78の仕様に関しては、型式番号による仕様とそれ以外の言葉によって説明された仕様とが混在している。前者が、RX-78-1~3であり、後者が初期試作型、中間武装型、後期試作型といったものである。これらをこれまでの論説に合わせて、それぞれ対応させていくと次表の様になる。

(表1 型式番号と仕様名/対応表)

型式番号	対応する仕様
RX-78 (無し)	初期試作型
RX-78-1	中間武装型
RX-78-2	後期試作型 3号機仕様
RX-78-3	G-3仕様 / MC仕様
RX-78-4	初期型には該当無し
RX-78-5	〃
RX-78-6	〃
RX-78-7	〃
RX-78-8	〃

少なくとも、RX-78-4~8に対する仕様名については、初期には存在していないことは明らかである。逆に言えばRX-78-4~8仕様という言葉も、後のセカンドロットで登場したことになる。

初期試作型、中間武装型、後期試作型という仕様名は、初期に発見された資料にその記載が見えることから、当初からこのように呼ばれていたことは間違いないだろう。これは、最初にRX-78-2仕様に改修された3号機の名称をとって、3号機仕様と呼称していることから明らかである。

一方、RX-78-3仕様以降の仕様は、いずれも後に開発された仕様であり、当初から存在した物ではないのである。この中でRX-78-4仕様以降は、いわゆるセカンドロットとしてまとめられているのだが、RX-78-3仕様については、その成立の仕方からして非常にイレギュラーであるとも言えるのである。

このように、対応させて考えるとRX-78-3仕様では、Gナンバーを仕様として用いているわけではなく、単に、「G-3が最初にRX-78-3仕様に改修された」とことによる仕様名であったと解釈することが妥当ではないだろう

うか。^{〔#36〕}この結果、「3号機仕様」同様に3号機を表すG-3という名称が仕様として用いられることになったといふことなのである。

つまり、これらの経緯から考えて、やはりGナンバーを仕様を表すナンバーとして考えるのは難しいと結論づけざるを得ない。

ここまでまとめたことで、とあえずG-1～G-8（あるいは、G-01～G-08）と表記した場合、各々がガンダム1～8号機に該当するといふ解釈で以降展開することとする。

さてここで少々考えていただきたいことがある。初期にロールアウトした8機のRX-78に対して、G1～G8という機体コードが与えられ、様々な試験などが想定されていたことは先に述べた。

この試験項目であるが、1～3号機は、実戦運用のための機体運用のためのデータ収集が主な物であり、実際に機体運用に合わせた改修がおこなわれていることは、前出の各種引用からもわかるだろう。つまり、枝番無しの初期試作型から、武装運用のための中間武装型、そして、実戦対応型の後期試作型（3号機仕様）と実戦に投入するための運用パターンを模索しながら、改修が繰り返されているのである。

一方、4～8号機のテスト項目は、おそらく「量産型MSの母体となった」という記述から考えるに、実際には、設計が流用されただけであり、機体そのものは特に試験されたのではないと考えられる。というのは、RGM-79の母体として用いられたのは「素体状態」の時であり、この時点では、事実上「MSとしての運用は不可能な状態」であったと考えられる。しかし、後に78-1仕様、78-2仕様へと改修を受けている点から1～3号機のデータに合わせて、ジャブローでの改修も順次行われていたことが判るのである。これは何を意味しているのだろうか？

筆者が思うに、RGM-79の開発に目処が付いた時点で、ジャブロー独自のMS開発計画にシフトしたのではないだろうか？

すなわち、実際にMSとして運用可能なレベルであるRX-78-2仕様までに改修を進め、その後の改修については、ジャブロー独自のものになった、といふことなのである。

このように考えると、「改装中であった4,5号機」という引用1の記述も違和感なく肯定することが出来る。

すなわち、ジャブロー独自の仕様で改装中であった4,5号機」と解釈できるのである。（この改修の際に、4～8号機仕様が設定されていると想定されるが、この件については、次項で触れる。）

再び1～3号機に話題を戻す。

1～3号機は、ジャブローで基本改修（RX-78-1仕様への改修）が行われた後、ルナツー（或いはサイド7）という記述も見られるので、まず3号機がRX-78-2仕様で改修され、つづいて1,2号機も改修されている。

おそらく試験項目としては、この時点で実戦投入仕様として固まっていたはずである。^{〔#37〕}つまり、この時点では、後のRX-78-3仕様は存在していないのである。

この試験運用の後、ホワイトベースに搭載し、実戦運用試験に用いられる予定であったが、ここでジオン軍のファルメル部隊によって強襲され、78-1号機は大破、78-3号機は小破となってしまう。この結果、ホワイトベースは、ルナツーからジャブローへと向かうことになってしまうのだが、これはRX-78の運用データ（試験データ）を量産型MSに反映するためだと言われている。既に量産型MSの基本設計は、4～8号機をベースとすることで行われているわけだが、実際の運用データについては、「MSとしての運用が不可能であった」4～8号機では行うことは難しく、実機による運用データが必要とされていたのである。^{〔#38〕}

現在では、小破した3号機は、2号機のパーツ取りとして使用され、オデッサ作戦の直前にホワイトベースから降ろされ、ジャブローへと回され、マグネットコーティングの試験機として用いられたと考えられている。これは、ジャブローから出撃したペガサス級ブランリヴァルに搭載されていたことから考えて問題ない解釈だと思われる。問題は、この回収された時期がいつなのか、という

〔#36〕

これは筆者は未だ持って、G-1仕様、G-2仕様と記述された資料を保有していない（確認していないだけかも知れないが...）ことから、この様に結論づけている。

仮に、RX-78-2をG-2仕様と記述している資料が存在している場合、本論は修正が必要となる。（RX-78-1をG-1仕様と記述しているだけならば、一番最初にRX-78-1に改修されたのは1号機であるため、まだ対応は可能である。）

〔#37〕

これは、サイド7強襲の際に、ガンダムが実質的に稼働状態であったことから間違いはないと考えている。

単なる稼働試験ならば、ビームサーベルは起動しない状態になっているだろうし、バルカンの弾は抜いているだろう。ほぼ実戦に近い形でのテストが可能となっていたといふことなのである。

これは、ガンダム・ジ・オリジンだともっと明確な形で描写されている。

〔#38〕

ただし、この件に関しては、現在では少々異なった解釈が必要となっていると思われる。というのも、ガンダムがアムロによって運用されたのが、UC0079/09/18である。実は、その2ヶ月前に、すでにRX-79型のロールアウトがなされているのだ。

つまり、MS運用のデータだけであるならば、「アムロのガンダム」のデータは必要とされないのである。ここで重要なのは、「アムロのガンダムが史上初のMS同士の戦いを経験している」という点なのである。

とである。ホワイトベースが補給部隊と接触したのは、UC0079/10/01の北米、同年10/09のアジア地区（これについては、北米説もある）、同年11/02のオデッサ近郊ということになるが、このうち回収が行われた可能性が最も高いのは、10/09の補給時である。10/01は、北米からの脱出行の最中であり、ミデア部隊もかなり無理をした状態での補給であり、ホワイトベースに乗り込んでいた民間人を引き取るのがやっとの状態であったこともあり、まず3号機の回収は無理であったろう。また、11/02の補給は、その3日後に黒い三連星との戦闘が行われ、部隊長であるマチルダ・アジャンが戦死していることから、この時の回収は無かったと結論づけてもいいのではないだろうか。（本来ならば、オデッサ作戦に前後して、3号機は回収されているとなっており、この補給時が最も可能性が高いと思われるのだが、状況からすると最も難しい時期だと思われる。）

一部資料には、ホワイトベースのジャブロー寄港時に3号機が回収されたという説（下記、引用6）も存在するが、ホワイトベースのジャブロー寄港は、11/27頃であり、12/02には宇宙へと打ち上げられていることと、12/08にはマグネットコーティングを施された機体であるRX-78NT-1が試験を開始していることから考えるに、ジャブロー寄港時に3号機を回収したという可能性は極めて低いことになる。

また、2号機のマグネットコーティングは、UC0079/12/27に行われていることと、アムロの2号機の反応速度の問題点の指摘による改修プランとして開発が進められた4号機以降のセカンドロット機が、11月中に既に稼働している^[#39]ことから考えても、3号機を復元し、テストを行うには、11/02の回収では期間が短すぎるのではないかという懸念も生じる。従って、本論では、3号機のホワイトベースからの回収を10/09と結論づけて論説を進める。

これらの想定から、旧来の資料で見られたルナツーで3号機を回収したという記述は、ルナツーで1～3号機の運用データを回収した、と考えた方が無難だろう。一部資料には、UC0079/09にジャブローに補給部隊によってRX-78のデータが届けられたという記述が見える。しかし、先述したように、ホワイトベースが地球上で初めて補給を受けたのが、10/01であるため、9月中にホワイトベースのデータを受け取ることは事実上不可能なのである。そのため、この記述はルナツー経由で持ち込まれた物であると結論づけられる。（この結果、大

量生産型としてのRGM-79^[#40]は、予定より早く、その実戦配備が行われることになったと考えられるが、本論ではこの件については、ここで軽く触れる程度にしておく。）

回収された78-3号機は、後にいわゆる「G-3ガンダム」として修復され、実戦に投入されている。この3号機の運用については、近年映像資料^[#41]が発見されており、ア・バオア・クー海戦に投入され、一部損壊したらしいことまで確認されている。また、別の映像資料^[#42]では、終戦条約締結後（資料では、UC0080/01/09の日付がみえる）のジオン軍残党との小競り合いにおいて、本機をGパーツと共に運用しているのが確認できる。

このように精査してみると、1号機は大破により損失、2号機はア・バオア・クー海戦において損失、3号機は損壊したものの終戦後一時運用されていた、という形にまとめることができる。（詳細は、下記表2を参照。）

なお、4～8号機は初期型として運用後、それぞれ改修を受けているため、別項で述べることとする。

（表2：初期型RX-78の仕様変更）

機番	時期	塲	仕様変更
1号機	建造時	ジ	RX-78（初期試作型）
	改修1	ジ	RX-78-1（中間武装型）
	改修2	7	RX-78-2（後期試作型）
	損失	7	サイド7強襲による
2号機	建造時	ジ	RX-78（初期試作型）
	改修1	ジ	RX-78-1（中間武装型）
	改修2	7	RX-78-2（後期試作型）
	運用開始	7	アムロ・レイ搭乗
	改修3	コ	RX-78-3（MC仕様）
	損失	ア	MSN-02との相打ち
3号機	建造時	ジ	RX-78（初期試作型）
	改修1	ジ	RX-78-1（中間武装型）
	改修2	7	RX-78-2（後期試作型）
	小破	7	2号機の部品取りに
	回収	--	地球上で回収
	改修3	ジ	RX-78-3（MC仕様）
	小破	ア	運用は続けられている

[#39]

ZEONIC FRONTにおけるマドロックのこと。

[#40]

初号機のロールアウトが、UC0079/08という記述も見られるが、これはRGM-79[G]、RGM-79[E]と考えた方がいいだろう。あるいは、ロールアウトしたものの、事実上の張りぼてであった可能性は否定できない。

[#41]

GUNDAM THE RIDEのこと。プランリヴァル内で確認できる。

[#42]

GUNDAM EVOLVE../11のこと。

G-3タイプのGアーマーが運用されていたことが判る。

4 ~ 8 号機	建造時	ジ	RX-78 (初期試作型)
	改修 1	ジ	RX-78-1 (中間武装型)
	改修 2	ジ	RX-78-2 (後期試作型)
	改修 3	ジ	セカンドロットとして改修 (別項に譲る)

場所は、「ジ」= ジャブロー、「7」= サイド7、「コ」= コンペイトウ、「ル」= ルナツー、「ア」= ア・バオア・クー、を表す。

ここまで初期型 RX-78 の運用と仕様についてをまとめてきたわけであるが、実はここまでは型式番号 = 仕様番号という形で説明を行っている。(表 1 がそのいい例である。)G ナンバーと仕様番号に関連性がない、という点は、従前見られる仕様説とは異なった部分だが、大筋は、型式番号 = 仕様説そのものであることが判るだろう。

ところが、次に提示する引用 6 は、この仕様説だけでは説明不可能な形の記述となっているのである。

(引用 6 資料 4 より)

(前略)同様に、サイド7 で開発されていた試験型の同型機にも微妙な変更が施されており、RX-78 ナンバーの MS も 3 機建造されていた。その内、実戦に投入された"ガンダム"が RX-78-2 である。RX-78-1 は敵の攻撃などによって損壊し、RX-78-3 はガンダムの予備、補修パーツとしてストックされた後、ホワイトベースが連邦軍本部のジャブローに寄港した際にテストヘッドとして研究工廠に搬入され、G-3 ガンダムとしてレストアウトされたと言われている。

どうだろうか、この記述内容から言えば、RX-78-1 ~ 3 というナンバー (ここでは敢えて型式番号とは言わない)を機番として使用しているとしか説明は不可能なのである。

この引用 6 の解釈については、次項でまとめる 4 ~ 8 号機に関する論説と共に行うこととして、本項を閉じたい。

2.4 ~ 8 号機のセカンドロット

前項では、初期型 RX-78 について解説を行ったが、本項では 4 ~ 8 号機について解説を行っていく。

4 ~ 8 号機は、素体のまま RGM-79 の母体となったことは前項で既に触れているが、同じく前項の引用 5 において、1 ~ 3 号機同様の実戦仕様に改修を施されていることも触れた。

すなわち、4 ~ 8 号機も RX-78-2 仕様という形で実戦投入可能な段階までは仕上げられていたということになるのである。(ただし、外装に関しては RX-78-1 仕様の形のままであった可能性は否定できない。^[#43])

しかしながら、実際に確認できる 4 ~ 7 号機の形状は、これら 78-1 仕様、78-2 仕様とは大きく異なったものとなっており、これら現在確認できる仕様の 4 ~ 7 号機を現在では「セカンドロット」機と通称している。

一度実戦仕様に仕上げられた 4 ~ 8 号機が、何故改めてセカンドロットという形で再設計されたかだが、これには 2 号機を運用したアムロ・レイ曹長(当時)の RX-78 の機能向上に関する要望があったと考えられる。

RX-78 は、連邦のもてる技術を投入したハイスpek機ではあったが、パイロットであるアムロの技量に機体が追いつけず、後にマグネットコーティングを施されることとなっている。

このマグネットコーティング作業が行われたのは、前項で記したとおり、UC0079/12/27 であるが、これはホワイトベース隊が実質的に囷部隊として作戦行動を取った結果、この時期になってしまったのであり、実際にはこの日より先前にマグネットコーティング作業は可能であったと考えられる。^[#44](つまり、アムロとしては、機体性能に難点を持ったまま運用を続けていた事になるのである。)

マグネットコーティングについて、いつ頃理論と実際の機材が完成したかについての明確な資料は存在しない。しかし、一部資料に 11/14 に RX-78 (時系列から見ておそらくこれは 3 号機であろう^[#45])にマグネットコーティングを行ったという記述が見られることから、3 号機の修復後に実際に実用評価が行われたと言うことは間違いないだろう。

3 号機のジャブローへの回収が、10/09 であるという

[#43]

この文章は、現在稼働している各種ゲームに登場するプロトタイプガンダムやフルアーマーガンダムが、この 4 ~ 8 号機の RX-78-1 仕様、または、RX-78-2 仕様時である可能性があるためのぼかした文章である。

詳細は、本文後半でまとめているとおりである。

[#44]

これは、マドロックの実戦配備された時期が 11 月中であり、G-04、G-05 の実戦配備が、12/26 に既に行われていること、そして何よりも NT 対応型としてマグネットコーティングが施された NT-1 が、12/25 には損壊していることからわかる。

逆に言えば、12/25 に NT-1 が損壊したからこそ、急遽 2 号機にマグネットコーティングが施された、とも考えられるのである。

[#45]

多くの資料で、3 号機はマグネットコーティングの試験に用いられたという形の解説が行われているため、こういった表現となった。

結論を前項では出しているが、同様に、このマグネットコーティングの期日からして、3号機の回収が11/02や11/27と考えるのが難しいことがわかるだろう。また、セカンドロット機の実戦配備時期を考えると、(セカンドロット機を生み出す原因となった)アム口の要望は、この3号機の回収の時点で行われていたと考えた方が無難であろう。

結果的にこのアム口の要望が、一度完成していた4～8号機を再び改修し、新たな機体として生まれ変わらせることになったのは、間違いないと考えられる。

しかし、このアム口の要望とセカンドロットへの改修がいつ決定したかについてや、実際にどの機体がどういった形で実戦に投入されたかなどは、未だ完全な形の資料は存在せず、疑問点が残っていることも事実なのである。

具体例を挙げよう。4～8号機に関しては、引用1では「4,5号機は実戦参加、6～8号機に関しては参戦記録が残されていない」といった形で記述されている。その一方、引用4では、「4,5号機は実戦参加、6～8号機も参戦したらしい」という形の記載となっている。この2つの資料は、極めて古い資料であるが、既にこの時点で記述内容の相違が生じているのである。

また、後に公開された資料^[#46]では、4～6号機の実戦参加は確認できるものの、7号機はフレームまでしか建造されず、8号機に至っては完全に情報が無いという状態なのである。

つまり、この3つの資料ではそれぞれバラバラな記述となっているということなのだ。無論、いずれの資料も明確に事実を記載しているわけではなく、推察で記されたかのような記述となっているため、完全にバラバラと言うことはできないのだが、これらを無難に解釈するとした場合、最も的確な考え方は、「それぞれの資料が異なった時期に4～8号機に関して記している」という解釈ではないだろうか。

すなわち、引用1に関しては、4,5号機を改装中という記述が見られることから、4,5号機の改装中に情報を得ており、後(おそらく終戦直後)に編纂されたため、情報が不足していたことから、先の記述になったものと考えられる。

一方、引用4は、引用1より若干後にまとめられたため、6～8号機の参戦事実があったという情報を得ていた、ということだろう。

最後の資料では、7号機はフレームのみ建造されているという情報から、セカンドロットにのみ限定して記述された資料であると考えられるのである。

つまり、4～8号機の記述については、少なくとも「ロールアウト直後のRGM-79型の母体であった時期」、

「RX-78-1仕様、RX-78-2仕様はまだ改修された時期」、セカンドロットとして改修運用された時期」と3つの時期に分けて考える必要があるということではないだろうか。

ここで少々時間軸を戻して考えたい。

RX-78の初号機ロールアウトは、UC0079/07/07とされた資料が存在する。(ただし、ロールアウトをサイド7とする記述もあり、詳細は判っていないのが実情である。)また、サイド7での最終運用試験がUC0079/08という資料も存在する。

これらは、資料があまり発見されていなかった時期の物であり、多少のミス等も存在する可能性は否定できないが、RX-78が初めてMS-06と戦闘を行ったのは、09/18であることから、少なくとも1ヶ月の間は様々なデータ収集が行われていたことは間違いのないのである。そして、V作戦を経由しない形でのRX-79計画は、RX-78の完成直後にスタートし、量産MSの開発計画も同時にスタートしていること、UC0079/08にはRGM-79の初号機が既にロールアウト^[#47]していることから、この約1ヶ月の間に量産型MSの母体としての役割を終えた4～8号機は、実戦仕様に改修されていたとしてもなら問題は無いのである。

これを時系列的に示すと、下記ようになる。

(表3:4～8号機の仕様変更の経時)

時間軸	4～8号機の仕様変更(赤字)
UC0079/07	・ロールアウト(初期試作型)
UC0079/08	・RX-79計画/量産MS計画開始 ・RGM-79ロールアウト
UC0079/09	・同時に4～8号機を実戦仕様に
UC0079/10	・サイド7で初のMS同士の戦闘 ・小破した3号機、ジャブローへ ・アム口の要望がジャブローに
UC0079/11	・セカンドロットへの改修はじまる
UC0079/12	・6号機の実戦投入を確認 ・4,5号機の実戦投入を確認

この表のように考えると、それぞれの仕様であった時期が特定されてくるだろう。

各機体ごとの機体仕様

ここでは、まず4～8号機のセカンドロット機体仕様に関してまとめてみよう。それぞれの機体ごとの解説を

[#46]

これはM-MSVのこと。

[#47]

後述するが、実はこの時期にG4計画もスタートしている。

RGM-79の完成によって、RX-78の一応の完成とみなされたのであろう。

この計画と、4～8号機の計画がどういった形で並立したか、については、本論の重点ポイントということになる。

行い、セカンドロット機全てに関するまとめを最後に行うこととする。

RX-78-4 ガンダム4号機 (G-04)

4号機は、宇宙戦用の高機動型として再設計された機体であり、ジオン軍に対する反攻作戦を考慮し、主戦場となる場所が宇宙であることから、重点を空間戦闘に絞って開発された機体である。アムロ曹長の要求に対する解答を空間戦闘仕様という形でまとめ上げた物がこの4号機ということなのだろう

しかし、実際には陸軍のXX型が地球上ではアムロ曹長の乗機として配備されることとなった(次項参照)と同様に空間戦闘機としては、オーガス主導で開発が進められていたニュータイプ専用機が配備されることとなり、この機体は一般配備向けの機体となっている。

同じプランとして進められていた5号機同様、反攻作戦のための主力機という位置づけになったのである。

この機体は、大型ビーム砲であるメガランチャーの運用を考慮し、さらにジェネレータの強化や冷却装置の強化といった改修が加えられている^[#48]。(しかし、エネルギーCAPの容量の問題があり、運用が実現しなかったという説もある。)

4号機は後にペガサス級サラブレッドに配備され、ア・バオア・クー或いはグラナダ戦線で運用されたといわれている。

RX-78-5 ガンダム5号機 (G-05)

5号機は、4号機同様宇宙戦用の高機動型として再設計されている。当初公開された資料では、5号機の運用プランについては、主武装としてハイパービームライフルが見られるだけであり、はっきりとしたものではなかったのだが、後年発見された資料では、大型ガトリングガンを用いているのが確認されている。

このことから考えるに、仕様プランとしては、実質的に4号機と同じ物ではあったのだが、4号機の大型ビーム兵器が実用にならなかったときの予備プランであった可

能性は高いだろう。そのため、一般的な仕様としては同じ物ではあるのだが、4号機がビーム兵器搭載のためさらなる改修を受けているため、図らずも同じ仕様で開発が進められた機体でありながら、型式番号通りに仕様の違う機体が誕生することとなったのである。^[#49]

5号機も4号機同様ペガサス級サラブレッドに配備され、ア・バオア・クー或いはグラナダ戦線で運用されたといわれている。

なお、この2機の運用については諸説あり、両機とも帰還したという説、4号機のビームランチャーの暴発によりパイロットが死亡したため運用が中止されたという説、5号機が大破し4号機が帰還したという説が存在する。

RX-78-6 ガンダム6号機 (マドロック)

6号機は、ビームライフルの弾切れ時などに火力の低下を補うために予備兵装を当初から搭載した形で再設計された機体である。

しかしながら、本機の開発スタッフは、砲撃戦関連の技術者などが加わった結果、機体そのものはちょうどRX-77型とRX-78型の折衷案的な機体となっている。

RX-77型は、比較的高い評価を得ており、量産案(RGC-80, RX-77D)、改良案(RX-77-3, RX-77-4)などが検討されていた。しかし、量産案は実現した物の、改良案の方は、実質的には停滞していたこともあり、その改良案のノウハウも6号機には投入されたものと考えられる。

6号機は、セカンドロット改修機では最も早く実戦に投入された機体である。未完成ながらもジオン軍の第2次ジャブロー攻略戦においてジオン軍MSの撃退のために起動しており、その後完全な状態で北米地区で運用されたことが確認されている。

また修復されたガンダム3号機と共にペガサス級プランリヴァルに搭載されたという説(実際に搭載されたかどうかは資料では確認できない)もあり、時間的問題から、当初計画の初期型RX-78の6号機の改修以外にも複数機同時進行で開発されていた可能性も否定できない

[#48]

M-MSVの当初の説明を見ると、「4号機にはメガビームランチャーを装備する予定であった。このために4号機のジェネレータ出力をさらにアップ〜」という記述が見え、後からメガランチャーが付け加えられたのではなく、当初から予定されていた仕様であることがわかる。逆に言えば、ジェネレータ出力のアップを行ったと言うことは、当初想定のスเปックが出ていなかったものと想定される。

[#49]

蛇足ながら、M-MSVにおける機体デザインと、外伝における機体デザインの違いであるが、これについては、どちらでもかまわないと考えている。本文中では、外観に関してはあえて記述していないが、「シークレットフォーミュラ」と「宇宙・閃光の果てに...」のストーリーを考えるに、おそらくこれから公式として受け入れられていくのは、後者である。しかし、M-MSVの誕生の経緯を考えると前者も無視する事はできないのである。

ストーリー的には、「宇宙、閃光の果てに... if」同様、IF分岐と考えれば、これから先、後者がデフォルトとなり、書籍等に掲載される4号機(あるいは5号機)の画稿もいわゆるG-04, G-05の物になってくると思われる。(おそらくであるが、論理的には、「アクトザクと戦闘したとされているが、実際にはビッグロの改良型だったという説もある」といった表記になると思われる。)マドロックと6号機のように、「仮に2機建造されていた」と解釈しても問題をクリアできる機体に対して、4,5号機は、M-MSV版と閃光版の機体が「実は同じ物」であることは、避けようがないと思われる。

だが、機体の仕様の違いもあるわけで、何らかの提示はしないことには、この考察の意味がない(笑)ので、機体デザインの差違については以下の提示をしておく。

「M-MSV版の機体は、4,5号機の仕様としてプランニングされた物であるが、実際にはコスト削減のため、様々なRX-78型(あるいは、一部RX-79型)のパーツを流用した結果、現在(すなわち閃光版)のような、比較的ベースとなったRX-78-2(-3)型のようなプレーンな機体デザインとなった。」

い。

というのも、6号機の武装をみるとビームキャノン搭載という記述と、300mmキャノン搭載という記述が存在^[#50]するのである。また、ジャブロー攻略戦で確認された機体の完成体では、ビームサーベルがバックパックに装備されているのだが、開発プランとして確認できる6号機では、脚部に装備されているのだ。

また、6号機プランの写真では、RX-78の改修機であるといったニュアンスの機体となっているのだが、ジャブロー攻略戦で確認された機体の完成体は、どちらかといえばオーガスタ研主導で開発されたNT型の意匠に近いパーツが見られるのである。

そのため、前者は6号機から改修された機体であり、後者はこのプランを元に別バージョンとして同時開発された機体である可能性も否定できないのである。

残念ながら、この想定を肯定するような資料は存在しないため、「可能性がある」といった記述しかできないが、この6号機プランの場合、既存のMS計画の発展型とも言えないこともなく、複数機存在していたとしてもおかしくはないだろう

RX-78-7 ガンダム7号機

7号機は、追加兵装によって様々な運用が可能な次世代機として開発が進められた機体である。

資料では「設計段階で終戦を迎え、基本フレーム以外は制作されなかった機体」という記述が見られるのみの機体であり、当時としては実現が厳しい機体コンセプトからして実際に実戦投入されたとは考えにくい。

しかし、この記述を逆に考えた場合、「すでに基本フレームは存在していた機体でありながら、未だ設計段階」という非常に不可思議な記述であることがわかる。

つまり、一般的に機体の開発は、設計が完了した時点で行われる物であり、設計を行いながら機体の建造を行うとは考えられないため、この記述は「セカンドロットとしては設計段階で終戦となり、実機は完成しなかった」と置き換えた方が正しいと考えられる。

つまり、この「基本フレーム」というものが、改修されたRX-78-2仕様の7号機を指しているのではないだろうか。(そうでなければ、前出の記述の場合「設計段階で終戦を迎え」が明らかに蛇足であり、設計は終わったが、基本フレーム制作中に終戦を迎えた」といった形の記述になるはずである。)

このように考えると、現在確認できる7号機のプランは、いわば机上のプランとして提示された開発コンセプトに過ぎず、実機の改修は全く行われていなかったと考えられるのである。

しかし、引用4に「6～8号機も参戦したらしい」という

記述が存在するため、改修されないままの状態、すなわち、RX-78-2仕様の7号機のみで実戦に投入された可能性が指摘できるのである。

この7号機にはFAプランとその発展型プランまで提示されているが、当時の開発能力から考えると明らかにオーバーテクノロジーの部分が存在する。終戦後に開発されたRX-78GP03が、このプランの内容を幾分含んでいるとも考えられることから、やはりセカンドロットとしてのRX-78-7仕様は、実機は存在していなかったと考えるのが妥当であろう

RX-78-8 ガンダム8号機

8号機に関するセカンドロットのプランは、現在に至っても確認されていない。これは、初めてセカンドロット機体の姿が確認された「Missing MSV」と呼ばれる資料に至っても同様である。

この資料で、4～7号機のプランが確認されている(7号機に至っては前出の通り机上のプランでありながら記載されている)ことから考えると、8号機の改修プランは、実は存在していないのではないかと考えられるのである。

つまり、8号機の機番は、型式番号RX-78-8として抑えられていたのだが、その改修プランは実際には終戦には間に合っていなかったのではないかと、ということなのである。

実際、RX-78型の仕様としては、既に一般的なMSの運用プランが出尽くしていると言っても過言ではなく^[#51]、これら以外のプランニングが検討されている間に終戦を迎えてしまったのではないかと、ということなのだ。

結果的に機番によって型式番号RX-78-8が仮押さえされていたため、このナンバーが一人歩きしたことが、RX-78-8というナンバーを世に出したということであり、それに該当する仕様は無かったと考えるのが現在では妥当ではないかと考えるのである。

また、引用4の記述から、7号機同様8号機もRX-78-2仕様には改修されていたことは間違いのないため、この状態で何らかの形で実戦に投入されていたと思われる。

残念ながら8号機の所在については、はっきりした記録が残っていない。しかし、戦後次々と発見された記録に様々な形で登場する「ガンダム」の中の1機が、実は8号機であった、という可能性は十分あり得るのではないだろうか。

特に別項でまとめているFSWS計画に関する機体群に8号機が流用されている可能性はあり得るだろう

[#50]

前者は、ジオニックフロントにおける設定で、後者はM-MSVにおける設定。そのため、78-6番機は、300mmキャノンで、別に建造されたマドロックはビームキャノンという解釈を行う事もできるのである。

[#51]

陸戦対応が、XX型と79(G)型、水中戦対応型が79M型(サブマリンは外しても問題は無いだろうが、一応記載)とRAG-79G1、空戦型がE型、ニュータイプ対応型がNT型、高機動空間戦闘対応型が4型、5型、(結果的にだが)砲撃戦仕様が6型、そして、換装型(重武装型)が7型、と一通りの仕様は揃っているのである。

セカンドロット機総括 (機番と仕様番号)

前項で RX-78-1 号機 ~ 3 号機の機体仕様の変遷と型式番号の対応表 (表 1) を示したが、4 ~ 8 号機に関しては、省略している。実は、ここで改めて説明をしたと考えたため、あえて省略を行っていたのである。

というのも、本論で最も重要なポイントをここで説明しなければならないと考えたからである。

(表 1-1 型式番号と仕様名/対応表)

型式番号	対応する仕様
RX-78 (無し)	初期試作型
RX-78-1	中間武装型
RX-78-2	後期試作型 3号機仕様
RX-78-3	G-3 仕様 / MC 仕様
RX-78-4	空間戦闘仕様
RX-78-5	空間戦闘仕様
RX-78-6	砲撃戦仕様
RX-78-7	換装型多機能 MS
RX-78-8	不明

表 1-1 は、前出の表にとりあえずセカンドロットを表す仕様を加えてみた物である。仕様名が苦し紛れなのは理由がある。

これは、明確な仕様名を示した資料が存在していないためである。また、8 号機に至ってはセカンドロットとしての資料すら存在していないのである。

何故こういった形で提示したかという、本論で最も重要な「型式番号 = 仕様」だけでは説明がつかない部分の一つがここで出て来てしまうからである。

一般的に仕様を分ける場合、機体の運用目的による仕様区分と改修による機体バージョンを表すための仕様区分が存在する。(両方を複合化する場合もある。)

RX-78-1 ~ 3 という仕様は、改修による機体バージョンを表すことは理解できるだろう。しかし、RX-78-4 ~ 7 (明確に 8 型仕様は確認できないため、この様に表記

する)仕様では、どちらの形で仕様番号を策定したか判らないのである。

表 1-1 では、筆者がとれあえぬ仕様として区分分けしたが、これを細分化し、例えば 4 号機を空間戦闘仕様 (高出力型) 等といった形で表現することは可能だろう。

しかし、機体そのものを考えると外見が若干異なっていることと、ジェネレータの載せ替えが行われているという程度の変更に過ぎない。しかも、この変更は当初同型として開発された 4、5 号機において大型ビーム兵器を運用するために追加された仕様なのである。このことから考えると、RX-78-5 の方が番号的に新しいため、高出力機として追加改修されたと考えるのが正しいのだが、実際には 4 号機が追加改修されているため、機体バージョンによる仕様番号ではないと言えるだろう。いや、そもそも 4 ~ 8 号機のセカンドロットへの改修は、並行的に複数のプランが実施されたため、機体の改修バージョンによる仕様番号とするには、あまりにも無理がありすぎるのである。^[#52]

逆に、運用目的による使用区分を仕様番号として割り振ったとした場合、今度は 4 号機と 5 号機の似通った機体運用に関する問題が出て来てしまう。一般的に考えれば、この 2 機の仕様番号は、RX-78-4A、RX-78-4B といった形で枝番処理されてしかるべきなのである。詳細は後述するが、同様に 6 号機の本来の開発コンセプトは砲撃戦仕様機ではなく、あくまで予備兵装の搭載にあり^[#53]、仕様としての形が後から付いてきたに過ぎないのである。また、機番と仕様番号が一致している点も、この運用目的による仕様番号という解釈にはやはりつらいだろう。

そこで先の引用 6 に注目してもらいたい。

この引用 6 では、1 号機 ~ 3 号機を表す言葉として、RX-78-1 ~ RX-78-3 が用いられているのである。つまり、明示的に RX-78-1 = 1 号機、RX-78-2 = 2 号機、RX-78-3 = 3 号機と示されているのだ。同様に RX-78-4 ~ 8 も、とれあえぬ機番であると考えてみるのである。

こういった論じ方をすると、単純に機番説を採っただけではないか、と言われてしまうが、ここからが本論のポイントである。

まず考えてみて欲しい。何故、機番説、仕様説がそれぞれ現れたのか。

これは、双方ともそういった形に解釈できる資料が存在している、という事なのである。従前の論説では、それぞれの記述の解釈を機番説、あるいは仕様説に双形で変化させていき、解釈としてどちらかの説に沿った物としていた。この方法だと、先述の引用 6 のような記述だと仕様説の解釈だと非常に問題点が多くなってしまい、

[#52]

これが例えば、RX-78-5 ガンダム 4 号機、とか、RX-78-7 ガンダム 5 号機といった形の型式であれば、機体バージョンによる仕様番号と考えられないこともないが、少なくとも現実にはそうならない。

[#53]

これは意外と勘違いをしている人が多い。実際、ZEONIC FRONT で登場した際も、こういった説明がなされたため、現在では砲撃戦仕様機として認知されてしまっているのである。

切り捨てるべき記述となってしまう 無論,その逆の例も多々ある。つまり,保有している資料の種類や解釈によってどちらの説がでてきてもおかしくないのである。

ならば根本的な部分の考え方を考えるしかないだろう。つまり、「RX-78-1 ~ 8 というナンバーは,機番としても仕様番号としても存在している」という考え方である。実際,そのように考え,解釈を少々いじることでこれまで出て来た問題点の多くが無難に解釈できるのである。

つまり,まとめてみると次のようになる。(先の 8 号機の解説部分で軽く触れているが,その完全なものと考えて欲しい。)

RX-78は,ロールアウト時に1~8番機として機番登録された。(この際の登録ナンバーをRX-78-1~8というナンバーと想定する。)

1~3号機は,細かい改修を施されながら,実戦仕様のMSとして運用試験に回されることとなった。一方,4~8号機は量産型MSの母体となったのち,1~3号機同様の実戦仕様改修が行われることとなった。

この時点では,仕様番号としての型式番号は,2種類 ^[#54]しか存在せず,実際,4~8号機もRX-78-2仕様までしか改修が進まなかった。

しかし,初期にロールアウトした8機以外の「ガンダム」の開発計画が,RX-78のロールアウト後にスタートしており,RX-79計画やG-4計画がそれに該当する。

あくまで別計画であったRX-79計画によるガンダムは,RX-79ナンバーを与えられており,仕様番号としては,全く別の物となっていたため問題とならなかったのだが,G-4計画の機体は,ルナツーで回収されたRX-78のデータを流用しているなど,V作戦機のデータを用いてプランニングされたため,(その機体のフレームが仮にRX-79ベースであっても)RX-78のナンバーが与えられることになったのである。また,これらの計画が進められている最中,RX-78の実際の運用部隊であるホワイトベースから,RX-78の機能改善に関する要望が提出されたことから,ジャブローのMS開発セクションでは,残されていた4~8号機と回収された3号機をそれぞれ新たなRX-78の改修型として再設計することとなった。

ここにおいて,他のRX-78プランとの差別化のために,初期8機をベースとしたプランに「機体番号と同じ仕様番号の型式番号」が与えられ,3号機~8号機ベースの仕様をそれぞれRX-78-4~8とすることとしたのである。(すなわち,機体完成よりも先に型式のみ与えられたということになる。)また,それ以外のRX-78タイプにはRX-78xxとアルファベットを用いた型式を与えることとした。このタイプの機体が,陸軍主導のRX-78XXタイプやオーガス研主導のRX-78NTタイプ,空軍主導のRX-78Eタイプということになる。後に建造されたガンダム開発プロジェクトの機体も,こういったルールに則ってプ

ランニングされたため,型式としては,RX-78GPが与えられたのであろう。

このようにまとめると,実は機番説,仕様説に関わる問題点に関しては全てクリアすることが出来る。

仕様,機番どちらの考え方としてもRX-78-1~8というナンバーが存在することになるため,いずれの資料も成立するのは当然といえは当然のことではあるが,こういった発想が行いにくいのが歴史解釈の分野である。本論では,各々の資料の記述そのものが曖昧である点(RX-78-1~3という仕様について明確に示した資料が存在しない点,セカンドロット機の型式が機番ではないと否定した資料が存在しない点,など)から,それらを両立する無難な選択を行ったに過ぎない。

しかし,現時点でどちらかの説に拘った場合に生じる矛盾点を全て解決するにはこの解釈が最も適当ではないかと考えるのである。

3.初期8機以外の78型及びRX-79型

さて,前項で本論の一番重要なポイントはまとめてしまっているのだが,引き続いて初期ロールアウトのRX-78型8機以外のRX-78型と,V作戦を経由しないでプランニングされたと言われているRX-79型についてまとめてみたい。

蛇足ともいえるが,この両系統をまとめることで,一年戦争時に現れた「ガンダム」に関するデータは,おおよそまとめ上げることが可能となるためである。

RX-79型の開発系譜

RX-78型MSというのは,これまで述べてきたように,様々な経緯が入り交じって開発された機体である。

前項ではRX-78型において,型式番号をナンバリングする形で表したもので,すなわち,RX-78-1~8というナンバーは,初期8機のナンバーを踏襲した物とした。

同様にアルファベット処理されたものは,この初期8機以外のプランとして開発された機体だという形で解釈を行っている。

実は,この解釈にもう一つ追加したいのである。

連邦軍のMS開発計画は,V作戦(RX計画派生),RX-79計画(RX-79[G]計画という記述も一部では見られる),G-4計画などがあげられる。

しかし,時系列から見るとV作戦の発動後,RX-78のロールアウトをもってRX-79計画がUC0079/07に発動し,G-4計画はUC0079/08に追って発動しているのである。また,他の量産MS開発計画と,これらRX-79計画やG-4計画との差違を考慮すると実際にはRX-79計画のなかの一つがG-4計画であったと考えるのが妥当ではないかと考えられる。

[#54]

ここで言う2種類は,最初の改修型である中間武装型 = RX-78-1 と 2番目の改修型である後期試作型 = RX-78-2 仕様のことである。初期試作型は,枝番無しのRX-78と解釈する。

というのも、G-4 計画は G-3 のデータを元に機体開発が進められたものであり、「G-3 実機を用いた計画」ではないのである。

また、一部資料において「RX-79[G]は、RX-78 の開発において、規格外としてはじかれたパーツ群を再利用した機体であり、パーツ間のバランスを取るためにリッターが設けられている」という記述が見られることから、実際には「RX-78 として生産するのはかなり困難を伴った」ということが想定できる。逆に言えば、生産されたパーツのほとんどはロールアウトした 8 機の予備パーツとして使用され、実際に組み上げた場合に予定通りのスペックを発揮できないパーツ群が数多く残っただけ、ということも想定できるのである。

ここから類推するに、型式番号で RX-78 のナンバーを持つ機体でありながら、実際にはその全てが真の意味での 78 型ではなかった、ということであろう。

実際、連邦軍は、RX 型 MS のロールアウト後にスタートさせた RX-79 計画は、資料によって扱いが微妙に異なっており、複数の計画をまとめた物であった可能性は非常に高い。

つまり、「連邦軍全体の新型 MS 開発計画」= RX-79 計画ということがいえるのである。G-4 計画もこの計画の一環と考えると、各研究所や陸海空軍それぞれで開発が進められた機体が V 作戦のデータを元に開発された機体を 78 型、そうでない機体を 79 型として登録していたとまとめられるのだ。

実際、その可能性は非常に高く、それに類する資料も確認できるのである。(内容については後述)

ここで前出の「G ナンバー 仕様」について、もう一度蒸し返してみたい。

前項ではセカンドロットの型式登録に際して、機番を元に登録したのが RX-78-4 ~ 8 という型式番号だと示した。そして、そのまとめ部分で「4 ~ 8 号機と回収された 3 号機をそれぞれ新たな RX-78 の改修型として再設計することとなった」と記述した。

実は、少々おかしな記述である。つまり、3 号機は単に改修されただけであり、再設計までは行われていないと考えられるからだ。

しかし、あえて前出のまとめはこういった形でまとめているのである。この時期、実際にジャブローには 3 ~ 8 号機が存在したこととなり、3 号機もアムロの要求に対する改修プランが実施されている。ただ、その改修プランが、モスク・ハン博士が持ち込んだ、機体の追従性を上げるための改修案であり、それを実施するための再設計が必要なかった」ということなのである。

先に「G ナンバーは仕様ではない」ことをまとめ、実際には「G-3 仕様」という言葉が存在することから、この仕様は後に追加した仕様である、という形に集約した。

つまり、このマグネットコーティングを最初に施した機体が G-3 であったため、マグネットコーティング仕様のことを「G-3 仕様」とするようになったということなのである。

このように考えると、「G-3 仕様」は、機体そのものを指す言葉ではなく、マグネットコーティングを施した、すなわち、「RX-78-3 仕様に準拠した仕様」というものではないだろう。

実際、この解釈は、あながち間違いとは言えないと思われる。というのも、RX-78NT-1 の開発中の写真^[#55]が確認されているのだ。この写真では、NT-1 に改修中の機体がメンテナンスベッド上で作業されている様子を撮影した物なのだが、この機体の頭部アンテナ部分に「RX-79 G- 」という記述が見られ、肩には「3」のナンバーが見られるのである。

G- という表記は、おそらく G-3 仕様を指す物と想定され、肩の「3」は、機番を示す物であると想定されるのである。

つまり、NT 型は、RX-79 型から改修され、RX-78 型の派生機として再登録された機体ではないか、ということが、この写真から読み取れると思うのである。

繰り返しになるが、RX-79[G]は、RX-78 の建造の際に生じた規格外パーツや余剰パーツを利用して建造されたという記述が見られる。

これから想定するに、[G]型同様に、RX-79 型として複数の機体がロールアウトし、存在していてもおかしくはないのである。

そして、陸戦型として設計された[G]型は、それ相應の設計変更を行われているのに対して、汎用型として計画されたであろう RX-79 型は、パーツ精度やパーツそのものが完全に揃っていないことを除けば、基本的に RX-78 型と同型」なのである。

さらにこの考えを肯定するに足る資料が存在する。

「連邦軍の RX スーツは大戦終結によってストップがかかったが、計画案としてニュータイプ用の完全型 GM と、残された RX-78 のフルアーマー化が存在したと言われている。」^[#56]

この記述は、初期の資料のひとつに見られる内容なのだが、ここで記述されている「計画案」は、後述するフルアーマープランの資料などから、実際には実行されていた可能性が高いと現在では考えられている。

それ故に、ここで記述されている「ニュータイプ用の完全型 GM」とは、(当時の資料では、RX-79 という機体は、RGM-79 のプロトタイプと考えられていたこともあり、)実は RX-79 から改修された NT 型である可能性が

[#55]

NewType 88/11 の出淵裕氏のイラストのことである。
イラストの概要については、本文中に記載したとおり。

[#56]

「MSV ハンドブック 1」より。

高いのである。 ^[#57]

また、フルアーマープランに関しても、FSWS 計画がプランニングされた時点で、装着できる機体の数だけ生産されることになったとされているが、実はこの FSWS 計画の発動時には、RX-78 型ではこれを装着できるのは、2 号機と 3 号機だけになっているため、事実上 RX-78 型が追加生産されていた、という事実が存在しなければかなりの不整合が生じてしまうのである。

そのため、FSWS 計画の資料における「残された RX-78」という記述は、「残された RX-78 (型の機体)」と補足を入れ、RX-79 ベースで建造された機体を指すと考えた方がより肯定的ではないだろうか。

特に、FSWS 計画による増加装甲装着機である、FA-78-1 はハインツ・ベア搭乗機を始め、様々な機番の機体が確認され、さらに、リバー・コロニー周辺で確認されたとされる機番無し機なども含めると、「存在しなかった」とは、言い難い状況になってきている。

そのため、RX-78 型の追加生産を記載した資料が存在しないことと、引用 1 の「ジャブローで製作された RX-78 の総数は 8 機」という記述を否定できる新たな資料が発見されない限り、これらの機体は RX-79 型であると考えるのが無難ではないだろうか。 ^[#58]

さらにこの想定を裏付けるかのような資料が存在する。先の NT 改修機の写真が掲載されていた資料に掲載されている MS 開発経緯に関わる年表がそれである。

これを抜粋し、まとめると以下のようになる。 ^[#59]

(表 4 :MS 開発タイムライン)

年月	事柄
0079/08	RX-78 完成後、RX-78 タイプの強化型 MS (後にアムロが使用することになるガンダム 2 号機、3 号機)が開発開始される
0079/10	2 号機完成、テストパイロットの手でデータ収集がされる 3 号機はマグネットコーティング導入されたため完成が遅れる

0080	唯一完成した G 1 号機は終戦後、連邦軍自身の手によって解体される
------	------------------------------------

ご覧になってもらうと判るのだが、UC0080 年の記載は、NT1 の解体についての記述である。正規の年表で確認するとこの事柄は UC0080/01 に確認することができる。また、先の写真の描写から、G 1 号機が NT 型 (おそらく NT-1 であることは間違いないだろう)を示していることは明らかである。

また、この記述からすると RX-78 型のガンダム 2 , 3 号機の開発が、UC0079/08 に開始されたことになっている。しかし、表 3 でも示しているが、初期型 RX-78 は、8 機とも UC0079/07 にはロールアウトしているのである。

つまり、ここでいうガンダム 2 , 3 号機は、アムロが搭乗した RX-78-2 (2 号機)や G-3 ガンダムとは異なった機体であると解釈するしかないのである。

ここで年表を顧みると、UC0078/08 にはオーガスタ研の NT 型の開発が開始されているのである。すなわち、多少の时期的差はあったとは思われるが、G-4 計画がスタートしたのが、この UC0079/08 だといえるのである。

つまり、RX-78 タイプの強化型 MS とは、G-4 計画における機体を示すのではないかと考えられるのである。 ^[#60]

さて、アムロが使用する「はず」だった機体といえば、まず RX-78NT-1 ,そして RX-78XX である。いずれの機体もアムロ用として用意されながら、実際には彼の下へは届かなかった機体である。

NT-1 は、リバー・コロニーにおける戦闘で損壊し、後に解体されており、また、XX は、ゴビ砂漠における戦闘で存在している。

すなわち、先の表 4 の 2 号機、3 号機は、これらの機体を表しているのではないだろうか。また、RX-79 計画の一つのプランとして G-4 計画があると、先に提示しているが、その前提で考慮すると、ここで示される 2 号機、3 号機以外の機体、すなわち 1 号機とは、RX-79 計画による機体であると考慮できるのである。

ここで疑問点が生じるのだが、それについてもフォローしておこう。G-4 計画では、陸、海、空軍および NT 対応型ガンダムが開発されている。しかし、2 , 3 号機

[#57]

この機体は、RX-81 を指す可能性も否定出来ないが、RX-81 が「ガンダムの完全量産を目指した機体」であるからには、白紙に戻された RX-81 プランというよりは、RX-79 ベースの NT 型と考えた方が、都合はいいかと思われる。

[#58]

なお、MIA データシートでは、「8 機ほど」と濁されているが、現時点では、可能性であり記述内容を覆すだけの物ではないと考えている。

[#59]

—文字突破氏の協力による。

[#60]

ここで、RX-78 型のセカンドロットという線も考えられないことはないのだが、実際にはこの改修作業は、UC0079/10 にスタートしたとしか考えられない(本文前出)ため、除外している。

については、このうち陸軍機と NT 対応機であることは想定できる。では、空軍機と海軍機はどうか、という点である。

実は、その点については、明確な資料が無いため推察しかできないのである。筆者の推察では、G-3 のデータを手でせずに開発を進めていた空軍と、独自にジムタイプからのガンダムを建造していた海軍は、この 2、3 号機プラン以降の(例えば、4、5 号機プランなど)として進められていたのではないだろうか。

そして、1 号機プランこそが、いわゆる RX-79 計画における機体ではないのだろうか。

従って、この表 4 で確認できる 2 号機、3 号機とは、G-4 計画にあてがったプランナンバーであると考えられるのである。従って、先述の表 4 の「後にアムロが(中略)2 号機、3 号機」という記述は、2 号機プラン、3 号機プランを意味していると考えられるのである。

つまりは以下のよう流れである。

1	RX-78 が完成し、量産型 MS のプランと規格外パーツなどを利用した計画が立案され、RX-79 計画としてスタートする 0079/07
2	強化型 RX-78 タイプの開発計画、G-4 計画が RX-79 計画の一環としてスタートする。RX-79 計画を 1 号プランとして、陸軍プランを 2 号機、NT 対応型プランを 3 号機プランという形で追加する。空軍、海軍プランも同様のナンバリングを受ける。 0079/08
3	1 号プランで完成した宇宙戦用(汎用)の RX-79、陸戦型の RX-79[G]などから派生型(BD や FSWS)がプランニングされる。

1 号プランは、RX-79 計画そのものであり、完成した機体は、RX-79[G]や、宇宙戦用の RX-79[E] (この機体は、現在確認することはできないが、宇宙戦用 RGM-79 [E] の存在から、完全に否定はできない)や RGM-79 のプロトタイプとも言われている RX-79 などが挙げられる。

このタイプの機体は、いわゆる RX-78-2 仕様とも RX-78-3 仕様とも受け取れる形状をしている機体が中心であり、その派生機として RX-79[G] の様な、独自の設計が施された機体があったと考えられる。

つまり、通常の RX-78 に類する外見をしている機体も多かったため、地球上の各戦線で確認された、「連邦の白い奴」は、いくつかの事例はこの RX-79 の 1 号プランであると考えられる。また同時に、幾つかの機体は、そのまま戦線へと送られたり、RX-78 の代替機としてフルアーマーガンダムやガンダム G ダッシュといった形で運用されたと考えられる。

一方 2 号プランは、3 号プランとの兼ね合いで考慮するといち早く完成し、テストパイロットがデータ収集していたことから、ゴビ砂漠へ輸送され、オデッサ作戦時のホワイトベースへ届けるための機体として用意された RX-78XX であると想定できる。

XX 型は、陸戦に特化した機体として G-3 のデータを流用し、改修が施されたプランとして、RX-78 ナンバーで再登録され、機体そのものは RX-79 型用として用意された RX-78 の規格外、あるいは余剰パーツによって建造されたと思われる。脚部アングルガードの形状などは、RX-78-1 仕様の形状に近く、そういった余剰パーツがベースとなっていると考えられる。

XX 型は、陸戦における瞬発力は RX-78-2 を超える機体として完成したため、総数 3 機が建造されたうちの 2 号機は、ホワイトベースのアムロ・レイ用に搬送されることとなったが、先に示したようにゴビ砂漠の戦闘で損壊し、結局届くことはなかった。

なお、このゴビ砂漠の戦闘は、UC0079/10/09 であり、ホワイトベースから G-3 が改修された日に起こっている。従って、この機体にはマグネットコーティングは施されていない物と推察され、ルナツーで得られた G-3 のデータのみで建造された物であると考えられる。

同様に 3 号プランは、マグネットコーティングのため完成が遅れたという記述から、改修された RX-78-3 号機のマグネットコーティングのデータを待っていたために完成が遅れた NT 対応型であろうことが想定できる。

この 3 号プランが、先に示した写真の機体であり、前出の表 4 の G 1 号機とは、NT-1 を示す物と考えられる。

この NT 型は、ニュータイプ対応機として建造が進められた機体ということであるが、連邦軍がニュータイプに関する認識を得たのが、事実上オデッサ作戦の頃であると思われる(アムロら、ホワイトベーススクルーの戦果がなければ、ここまでは認識されなかったはずである)ことから、当初は RX-78 の次世代型 MS の開発プランをジャブローの RX-81 プランとは別の形で推進した物だと考えられる。^[#61]そのため、当初プランでは反応速度などの改良型のガンダムといった機体であったのだが、G-3 のデータと、マグネットコーティングの技術投入により、ニュータイプの反応速度に対応できる機体、すなわち、ニュータイプ対応機として RX-78NT として再登録されたと考えられる。

筆者の推測であるが、この次世代機としての初期状態の姿こそ一部資料で見られる赤い NT-1 (通称 NT1 プロト)ではないだろうか。

なお、NT 型は、通常型コクピットの NT-2、78-1 番機の初期塗装に近い NT-3 と 2 ~ 3 番機も確認できるが、それらの機体の詳細は不明である。また、アムロ・レイに引き渡されるはずであった機体も、12/25 の1ボアコロニーにおける戦闘で損壊しており、結果的に引き渡されることはなかった。(蛇足ながら、この NT-1 の損壊により、アムロが要望していた反応速度の向上は、急遽

[#61]

これは、一文字突破氏がホビージャパン誌で発表したジムカスタム試作型について、本サイト内で設定考証を行った際に、RX-79N という型式とし、N は次世代(NEXT)を表すと、提案したことがあるのだが、これをここに引っ張ってきている。

RX-78-2 にマグネットコーティングを施すことで、対応が成された物と考えられる。)

空軍プランと海軍プランに関しては、前述したように資料不足であるため 4 または 5 号プランとしていずれが該当したかは不明である。

海軍プランは、RX-79M ガンダムサブマリンと言われているが、海軍では RAG-79G1 水中型ガンダム、アクアガンダム(型式は不明)といった他にもガンダムタイプを開発している。これはジオン軍の水陸両用 MS に苦汁をなめさせられたことから、G-3 データの流用によるガンダムタイプだけではなく、ジムの改良型など様々なプランニングを実行していたと考えられる。

空軍プランは、宇宙軍と空軍の不仲が影響したプランとも言われている。開発された機体は、RX-78E GT-FOUR がそれで、宇宙軍から G-3 のデータが提供されなかった空軍は、提供されたパーツ群を元に、独自にジェットコアブースターなどの既存の技術をベースとした機体を建造した。

他の G-4 計画プランがコアブロックを取り除く方向性であったのに対して、空軍プランはコアブースタータイプの発展型として、後の TMS(トランスフォーマブルモビルスーツ)の原型とも言うべき、簡易変形機能を持たされ、ブースターモードから中間形態、MS モードへと変形が可能となっていた。

しかしながら、このプランではあまりにも要求されるテクノロジーレベルが高く、都合 6 機(ブースターモードと簡易変形プランの試験機が 3 機、実用試験機が 3 機)が建造されているが、実質的には実用レベルになったとは言いがたい機体であった。

以上のように、G-4 計画は、RX-79 計画から派生し、それぞれの開発プランにおいて次世代機の開発が進められたが、1 号プランからもそれぞれの派生計画が進められている。先に示した RX-79[G] 陸戦型ガンダムもそういったプランの一つであり、量産型 MS の開発プランとしての RX-79 などとは異なった形で、RX-79 [G] 計画として立案されている。さらに、この機体を利用し、RX-79BD 型が開発されるなど、複数の派生プランも存在したとされている。(先に示した FSWS 計画なども一つの派生プランとも言えるだろう)

こうして考えると、RX-78 そのものは、実質的に初期に建造された 8 機だけである可能性が極めて高い。

だが、生産されたパーツ群は、実際にこの 8 機を稼働させるに足るだけのものではなく、それ以外の予備機(建造されるとした場合)や要求規格外のパーツなどを含めると相当数に上った物と考えられる。実際、RX-79[G] だけでも 20 機余りは生産されていたと言われており、かなりの 78 型パーツベースの機体が存在していたことは間違いのないであろう

また、NT 型は、既存の RX-79 からの改修だけではなく、後にオーガスタ系と呼ばれることになるように、独自のパーツ群も開発を行っていたことが判っている。これは、NT 型そのものが機能向上を前提とした特殊な設計であったため、既存の RX-79 からの改修によるものだけではなく、NT 型の様々な派生型としての仕様が想定され、それぞれ建造されたことにも端を発していると思われる。

結果的に、RX-79 ベースとはいいいながらも全く独自の機体として完成した NT 型であり、その設計の際に得られたデータは、RX-76-6 (一般的に 6 号機として認知されている機体ではなく、マドロックと呼ばれる機体のほうである)や、RGM-79N といった戦後の高性能タイプのジム、また、その開発の経緯から MRX-002 というユータータイプ研究所の研究機のベースともなっているのである。

終わりに

ここから、論文調から筆者の個人的考察へと記述を戻す。

つらつらと書き連ねてきたが、RX-78 型の機体の型式番号における、78-4 以降の仕様としての番号と考えたときのバランスの悪さは、一般的にいわれている、「4 番目の仕様だから 78-4」という考え方ではなく、機体登録番号 78-4 の機体が、最終的に目指していた仕様が RX-78-4 という型式番号になった、と考えると非常に収まりがよいことが判ってもらえると思う

この考え方だと、RX-78-8 という番号だけ存在していて、実際の仕様が明かでない番号が存在していても、その仕様番号と仕様の不一致も問題とはならないのである。また、6 号機の存在が仮に複数であっても、それぞれが別機体であるという解釈が可能となるため、論議上は問題とならないのである。^[#62]

RX-78 に関しては、これから先も様々な新事実が発見されるであろう。しかし、近年の作品の傾向からすると旧来の資料が完全に否定されることは無いものと思われる。ただし、これから先も様々な作品が製作されていく過程で、ガンダムが増えていくことはあっても減ることは無いのである。

しかし、旧来の資料を完全に否定されることがないと考えられると言うことは、逆に言えば、すくなくとも初期に建造された 8 機の RX-78 以外の機体は、何らかの追加生産された機体であるという解釈を行うかないのである。現在アミューズメントセンターで稼働中のゲーム「修羅の双星」では、RX-78-1 や FA-78-1 がゲーム中に登場することがわかっている。「ゲームだから」と簡単に切り捨てることができないのは、近年のゲーム作品の設定面での充実からすると明らかであり、この作品に関

[#62]

すなわち、初期の RX-78-6 号機から改修された物が、M-MSV 版の 6 号機であり、RX-79 ベースの 6 号機がマドロックと解釈できる。

しても新しい設定が公開される度にこの論説そのものが変更される可能性も否定できないのである。

「修羅の双星」では、これらRX-78-1やFA-78-1だけではなく、本来4機(あるいは、FMSまで考慮すれば5機だが)しか存在しないはずのMS-06R-2がプレイヤー機として登場することがわかっている。この機体がいかなる経緯で生産されたのか(或いは、既存の機体がユーザー機として配備されたのか)が公開されなければ、不整合面が残った状態が続いているだけに過ぎない。

現時点では、このRX-78-1やFA-78-1は、RX-79ベースの機体であるか、初期RX-78の7号機、または8号機であるという解釈しかできない。これに関する結論も保留という状態なのである。

今回、本論を再び修正した最大の理由は、前回までの論説で不都合があった部分を焼き直したことで、これら修羅の双星などハーモニー・ガンダム関連の機体設定が公開された際に、それらに対する解釈を投入できるように論説の柔軟性を上げるためである。

結果、従前の論説に比較するとより安定感の強い論説になったとは思のだが、新たな問題点が出て来たことも確かなのである。

無論本説は、本サイト(というか、筆者)の独自の暴論に過ぎない。従って、これが真実だと主張するつもりはないし、また、そうあること自体、ほんらい間違ったことである。しかしながら、既存の資料の紐解き方としては、一つの方向性を示すことができたのではないかと考えている。

もちろん、賛成意見、反対意見があったら積極的に提示していただきたい。その意見に対して、こちらとしての解答が示されない場合、この論説は完全に崩壊してしまう。それだけに筆者としてもそれら意見に対応するための資料解釈が必要である。また、新たな解釈論を提示できる機会もあるかもしれないのだ。

なお、「仕様説が通説だから間違い」などといった、非建設的意見の場合、筆者としてスルーする可能性は高いのでその辺はご了承ください。

本文引用資料について

資料1 : 1/144 プロトタイプガンダムインストラクション

資料2 : プロトタイプガンダムメカニカルファイル

資料3 : MIA プロトタイプガンダムデータシート

資料4 : PG ガンダムインストラクション

参考

プロトタイプガンダムのメカニカルファイル

このファイルに関しては、限定配布物であった関係で、現在では入手が困難となっている。

そのため、本文内容の記述内容の精度アップのため、全文引用の形を取らせていただいている。(さすがにまずい部分もあるかと思うため、場合によってはこれを削除した状態での再公開もあり得るので、ご了承いた

だきたい。)

メカニカルファイル(表)

「AAA」として秘密裏に進められた連邦軍のモビルスーツ開発計画で生まれたのが、RX-75、RX-77、RX-78の3種のモビルスーツである。開発順位はそのナンバーより追うことが出来、最終的に完成したRX-78をもって、連邦軍は初めてジオンMS技術を上回る兵器を完成させたと言ふ事ができる。

RX-78、通称ガンダムは連邦軍ジャブロー基地において開発が進められ、母体と呼べる物は総数8機が製作されている。1~3号機はルナツー基地へ輸送され、熱核反応路の強化、冷却システムの増強という改修工作を施されている。

ガンダムの標準兵装は、すべて外装式を採用しており、戦闘状況に合わせた選択が行われる。通常装備としてシールド、ビームライフル。固定武装としてビームサーベル、60mm機関砲2門を持つ。

メカニカルファイル(裏)

RX-78の名を冠して製作された8機のガンダムの内、1~3号機は改修工作と実用試験のためルナツーへ運ばれた。これらは呼称としてG-1~G-3ガンダムという名が与えられており、G-2はホワイトベースへ搬入、ニュータイプパイロットアムロ・レイ少尉によって数々の戦績を残している。G-1は奇襲攻撃で失われ、G-3は後にフィールドモーターにマグネットコーティングを施した形で実戦参加している。

残る5機はジャブロー工廠から宇宙へは運ばれず、RGM-79生産のための母体となったが、後にGナンバーの仕様に武装されている。4・5号機はサラブレッドに搭載、残る6~8号機も参戦したらしい記録が確認されているが、実際にどの程度まで仕上げられて実戦に投入されたかは実機が回収されていないため、不明である。これらの試作機は実働途上だったFSWSに参入される予定もあった。

連邦軍モビルスーツ(編註:原文は、「モビルスーツ」と誤植)の技術的に優れていたのは、そのコクピットブロックが、変形可能なライフポッドとなっていた点で、これ自体戦闘機状態に変形する事も可能であった。また装甲はセラミックと発泡金属のハニカムによる三重装甲で、衝撃吸収度を高くし、また被弾箇所の交換がユニット化されていた。さらにエネルギーCAP方式のビームライフルを標準兵装としているため、発射数こそ限られていたが、巡洋艦なみの破壊力を持つモビルスーツとして完成していた。この機体のコストパフォーマンスを考慮して製作されたのが、大量生産型RGM-79ジムである。

更新履歴

H16/07/18	- Rev.1.00	- 旧 MS コレクション解説より,新説/珍説プチ上げま Show!に移動
H16/08/11	- Rev.1.50	- テキスト形式のまま,旧解説に,新規解説部分を追加
H16/08/12	- Rev.1.51	- 第 1 項に追記 (一部公開)
H16/08/22	- Rev.1.70	- RTF 型式へ変更,一般的に追記 (非公開)
H16/08/28	- Rev.1.71	- 一般的に追記 (非公開)
H16/09/03	- Rev.1.74	- 一般的に追記 (非公開)
H16/09/10	- Rev.1.80	- RTF 型式からHTML 形式へコンバート
H16/09/16	- Rev.1.81	- 第 3 項を追記
H16/09/20	- Rev.1.82	- 第 3 項を追記
H16/11/11	- Rev.2.00	- 完成版として公開
	-	-
H18/11/29	- Rev.2.01	- PDF 版として全面改定 (非公開)
H18/12/14	- Rev.3.00	- 誤字脱字等の修正, Wiki 内にて公開

Rev.3.00 を持って,旧バージョンからの改訂を一旦終了する。
以降,本バージョンのバージョンアップのみに移行し,旧バージョンは,本館過去ログからのリンクのみとする。

SPECIAL THANKS (順不同)

皆さんの掲示板での投稿や, mixi での意見交換などが作成に大きな力を与えてくださいました。

- ・一文字突破さん
- ・カセクシスさん
- ・九羅星さん
- ・ゼノタさん
- ・だっちゃんさん
- ・BASARAさん

参考

サイト内における他の考察は,以下のものを始めとして多数が現在閲覧可能です。
機会がありましたら,他のものもごらんになってください。

- ・アクシズナンバーの謎?
- ・シャイニングフィンガー
- ・百式の開発における謎?
- ・2種類のFD-03が存在?
- ・ガザDの色はピンクか?
- ・ペガサス級ハルナンバー
- ・異端のMS群~ジオニックの陰に隠れたMSメーカー

最後に

ご一読ありがとうございました。
限定公開!実験場の管理人、あさぎりです。

枕で語りましたが、この本はこれまでのサイトでの考察展開とは異なった方法で提示しています。
最大の理由がやはり前回同様、分量が半端ではなくなった、ということだったりします(苦笑)
(なぜPDFにしたかについては、枕で語ったレベルのものしかありません。詳細が知りたい方は、前回のファイルの後書きをご覧ください。)

今回のファイル作成における目標の一つが、GUNDAM OFFICIALS的な高密度文書として仕上げてみるというものでした。最終的に、OFFICIALSにはかなわないまでもそれに匹敵するような文章にまとめられたら意図したところは成功だったのではないかな、と考えています。(何せ、筆者はバリバリの理系人間なので、文章的におかしな所も多々あるかと^^;)

また、今回は前回PDFの制作において手探りであった部分を、様々に変更しています。いずれもまだトライ&エラーの域を抜け出せませんが、メインで使用している一太郎2006のDTPモードの機能を様々テストしているといった段階です。(故に今回は、機能としての「脚注」を使ってみました。)

とにかくワープロで凝った文章(HTMLで普通にできない縦倍角や横倍角、行途中のイラスト挿入など)を行っても、それがそのままファイルになるというのは、なかなかおもしろい物です。

前回の後書きでも触れていますが、同人誌活動を行っていた頃の楽しさを思い出しながら「ああでもない、こうでもない」とまとめてみました。

様々なご意見等ありましたら再び文書内をいじり倒してみたいと考えていますので、積極的にご意見は下さい。

次回がありましたら、色々な人に参加してもらいたいと考えてます。あなたもどうですか?(笑)

奥 付

発行日：平成 18 年 12 月 14 日発行 Rev.3.00

発 行：限定公開!実験場
(<http://www.synapse.ne.jp/mist-a/>)

編 集：あさぎり

注意

本書の内容は、独自解釈に基づく物であり、すべてが機動戦士ガンダムシリーズにおける公式な物ではありません。

本書の内容の無断転載を禁じます。
転載希望等ありましたら、上記サイト内掲示板へその旨連絡をお願いします。よほどのことがない限り、拒絶することは無いかと思えます。
内容に関する質問等も同じ掲示板でお願いします。